ませぬと云ふ。第六場、ライスタアが入つて來て、遮つて入れない奴の面が見たいと云ふ。女王が下れといふ、そのお聲には、拙者を憎むブルレイの響があると圖々しい、抗辯が出來るならしてみよと女王がいへば、お二人の相談に、ブルレイ殿は不用だお下りなさいと云ふ、女王が下らないでよろしいといふ、ここで伯は巧に快辯を弄して、漸次、女王に近づいてゆく所をシルレルが手際よく書いて居る。エリザベットが、手紙をみせてやれとブルレイに命ずる。手紙を手にとつて、いかにもこれはマリア樣の御眞筆に相違もなし又、あのお方が眞實心からお書きになつたものと認めますと平然たる態度を裝つて述べる。ただ過失といふのは、はじめから、女王樣に、かかる計畫を立ててゐますと打明けてから着手しなかつただけです、ブルレイ殿は、實行より言ひ觸らしを先にせられるが、此方は實行を先にしましたのだ、ブルレイ殿は、計畫を探り出したと誇らしげに仰せられるが、拙者の方がズッと底の底まで知つて居りますぞ、拙者の働きで、マリア殿は此の國を逃げ得られな

いのだ、女王は、モルチメルを信じ込み、御内密にお賴みになつたことが御座らう、ブルレイ殿や、彼奴が、恐ろしい法王黨で、マリア樣の第一の味方で、女王へ兇刃を向けさせた怖るべく憎むべき奸物でござる、それが、マリア樣と拙者とを結ばうと企てたによつて、その爲す所を見て居り、遂に取抑へて、御殿中の衛兵に渡しましたら、逃げられぬ所と自刃しました彼奴さへ、生きて居れば、拙者の幸福なれども、致し方がござらぬといふ。ブルレイが、貴公が殺したのではござらぬかと突込む、衛兵を呼んで尋ねよと云ふ、衛兵を喚びて事實を語らせる。ライスタアは機會の來るまで、マリア殿を御處刑なさることを御猶豫あれと御勸めしたが今こそ時機到來です、早速御執行遊ばされいといへば、その執行をライスタア伯に仰せつけになることが最も適任でござらうとブルレイが女王に勸める。そんなことは、身分の低いブルレイ殿が似合ひ申さうと承知しない。第七場、ケント伯が入り來つて人民が、玉體の安否を氣遣ひ、早くスチュアルトの首を落して安心させて呉れと請願し

て居りますといふ。第八場、ダウイソンが、マリアの處刑の執行狀に御署名がいただきたい、民が熱望して居りまするといふ。第九場、タルボオトが入り來り、死刑執行に反對して、生けるマリアは御恐れなるに價しないが死せるマリアは恐ろしい力を呼びますぞと云ふ。ここに於て、女王は、今日兇刄の場から救つて呉れた貴君から、さう云はれては迷はざるを得ない。一層あの時殺されてゐたらこんな判斷に迷ふことはなからう、妾は王たるに敵しない王の職責は難儀なものだといふ。ブルレイは、このまま彼女を生かしてお置きになると、人民は、どんな苦境に轉落するかも知れない人民を愛するの誠を、今日お示し下さいと云ふ。第十場、エリザベット一人、佛蘭西は仇しようとして居り、西班牙は戰の用意をして居り羅馬法王は、隙を窺つて居る、ああ、マリア・スチユアルトといふ名ほど妾に祟るものはないと嘆く。第十一場、女王の前にダヴイゾンが人民は、タルボオト殿の姿を見ると、國第一の忠臣だと靜まり、あの情理兼ね備はつた御辨舌に聽衆は感心して退きましたと

いふ。女王は、署名せよといふから署名したとマリア死刑宣告文を差出して、直に執行せいとはいはない保存せよともいはない、冒險して責を引受けよといふ、ダヴイゾンが明に御腹中をお示し下さいといふと、わからずやだと荒々しく去つて了ふ。第十二場、ダヴイゾンが女王にゆかれて當惑してゐる處へブルレイが出て來る、早まつては、ならないとダヴイゾンが云ふのを搆はず書面を引攫つて去る。

第五幕、第一場、いよ〳〵死刑と定まつたので、ケンネディもバウレットも副監守長とも云ふべきドウラリも黑の喪服を着て居り、預つて居た金銀珠玉を持ち運んで返すのを、ケンネディが始末する。ケンネディ一人の所へ、マリアの舊臣メルヴイルが、久しく遠ざけられて居たが許されて入つて來る。二人は久々の對面で、先づ涙が先に立つ、今日は貴女と二人は確りした心を持つて女王のお心を引立たせませうといへば、そんな御心配は入りませぬ、女王樣にはちつとも御取亂しなく立派に御覺悟遊ばしてゐられます。若者がここからお救ひ申すと誓つたから、どうして

よいかと御思案中、騒がしく人の入り來つた樣子なので、救ひの人々かと思つてゐたら、死刑の用意をする大工どもが入つて來たので、バウレット殿から、ライスタア伯の裏切、若者の宮中で無念の自害を聽かせされて其の若者の爲めに涙を落されましたが御自身には天國に安らかに入らうとお騒ぎは少しもありませんでした。そして、僅の時間を祈禱に、遺言や知人への離別狀やらをお認めになりましたと老女は泣き語る。第二場、メルヴィルに逢つてマリアの侍女キアアルは、夫が、女王に背いて、法官達の前で、僞證をしたといふことの腹立たしさ、法廷へ妾も出て夫の前で、夫を詰り、女王樣の無實をば述べようと思ひますといふ。第三場、侍醫のバルゴインが、キアアルに女王に葡萄酒を一杯差上げて下さい、御顏色に血の氣が見えないで、死をお恐れになつたと惡口の種を與へたくありませんからといふ、メルヴィルに、ケンネディが、やがてこへお出ましになると云ふ。第四場、侍女等が出て來て、女王が今一人で神に御祈り中だと云ふ。第五場、葡萄酒を入れた黃金の

杯を持つたキアアルがメルヴィル等に、刑場の物凄い用意が出來てゐるのを見たと物語る。第六場、人々の嘆きの中へ白い服を着け十字架を持ち毛髮に冠を載せたマリア女王がしづ〳〵とあらはれる、その死を超越したやうな氣高さに一同退つて頭を下げる。女王は、今日こそ魂が自由の境に往き得るのをそち達喜んでくれと云ひ、ふとメルヴィルを見て、これは嬉しい同門の歸依者、尊重すべき騎士、妾の臨終の證人が得られたとうれしげになほ、他の臣下の健否を尋ね、それから、メルヴィルにスチユアルト王家に生れし身であり乍ら死ぬる前に親族の誰にも面を合せ得ないのが無念である。どうぞ、わが義兄弟である佛國王、叔父君の大僧正、從兄弟なるハインリヒ・ギイゼ親王にもよろしくおわかれの辭を傳へて呉れ、又西班牙國王にも我身を救はん爲めに戰を起されたことを謝し奉れなどと賴まれ更に侍女に向ひ、長い間よく忠勤をつくしてくれたそち達の將來は佛蘭西の兄王に推薦して置いたから早速彼地に渡つてくれそれから、今まで取り去られてゐた所有品を返され、處置を

せよと許されましたから、これを收めてくれ、おゝアリックスよ、ゲルトウルドよ、ロオザムンドよ、そち達は若ければ飾りたいであらう寶石と衣服とを收めてくれ、と云ひキアアルには、そなたには、こゝで物は取らせません、それは夢々、そなたの夫に對する怨みなどではない、遺言狀をみて呉れと云ひ、ケンネディを呼んで、おゝ忠義者のハンナよ、お前は寶玉に心を留めないことをよく知つて居るから、此の手巾を預ける、お前は、いよ〳〵長い別れになる時、妾の眼隱しをこれでしてくれよ、そのことを、賴みますと云ひ、それから手を差出して、最後のわかれを受取つてくれといふ、侍女等が一人一人近づいてそれに接吻する。女王がその度毎に、やさしい言葉をかけていつまでも健在でありよと云ふので侍女等の胸は張り裂ける思ひである。第七場、マリアは、メルヴイルに、こゝに一つ氣がかりなのは、舊敎の僧侶を近づけ得ず、異敎の宣誓を受けるは本意で無いと云ふ。メルヴイルは、唯眞心でお祈りあればそれが天國では價多いものだと云ふ。女王はなほ此處では、寺院

も、僧侶も、宣誓も儀式もないと嘆つ。メルヴイルは此の獄中へも神のお惠はある、お信仰さへ厚ければこゝへ祭壇も備へられますと、卓上の酒を示す。女王はその意を悟り、『爾等のうち二人のもの地に於て心を合せ何事にても求めなば天に在す吾父は彼等の爲めに何事もなし給ふべし、蓋しわが爲めに二三人の集れる所には我もその中に在ればなり』と救世の神は仰せられた。されば心を淨めて御身の前に、臨終の懺悔をするほどに、僧侶に代つて赦罪の宣告をしてくれよとやゝ元氣づけば、さほどの御信心にましせば、神の惠を垂れたまふこと疑無し、此處には寺院も僧侶も宣誓の儀式も無しと仰せられるが、御覽あれ神の目のあたりに降臨ましますと頭にいたゞいて居た冠を取れば聖餅を入れた黃金の神器が輝いた。これは法王が、女王樣の御爲めにと御自ら御齋めになつたものと云ふに喜び、臨終の歡喜にと御用意あつたか有難や、かく天つ御使の來迎に逢ふうれしさ、以前妾の下臣であつたそなた今は大御神の下僕、御前に跪かうと云ひ愼しんで伏す。メルヴイル頭上に十字を切

り天父天子神靈の名によつて尋ねむこりやゝリア、そなたは心に省み胸に問ひ神の御前に眞の懺悔をする覺悟であるかと云ふ、あゝ、妾、御神のお赦しを願ひ乍ら、憎み妬み仇討の心で胸が一杯になつて居たのでございますと云ふ、そなたの罪を悔ひ、神にすがらうとする心は堅いかと問はれ、眞實堅固でございますと答ふ。然らば、最後の懺悔であれば心を苦しめる罪業悉く開陳致せ、吁、罪深い戀にあつたばかりか、僞り多い淫亂男に心を引きつけて居りましたと應ず。それらの一切現世の念を斷ち神の御心に入らうとせられるか。今は、天國に入らうと現世の煩から逃れました。尙、心を苦しめる罪は無いか。王にして又、夫たるべき人を亡き數に入れ誘惑者に浮氣心をゆだねた罪を贖うと久しく努めて居るけれども、きれいに心から拭ひ去られない心地がします。疾く悔ひ神にたよりたまへ、なほ心にかゝる罪はないか、この時に當り、もし神靈に詐りを申されたらば、永刼、地獄に落ちられるぞ。この外包み隱したことはありません。包み隱しはないと云はるゝか、エリサベット

女王に反いた人々に加擔なさつたとは申されぬか。妾の懺悔は終りました。いやいや良心にお聽きなさい加擔の底心もなかつたか。牢獄から救はれようと諸國の王達に向けて試みたが、女王の生命を奪はうとしたことは毛頭ありません。されば、そなたは、そなたに裏切つた臣下が僞りの證を立てたと申すのか。妾の心には詐りはありませむ、惠深い神樣はこの無實の罪で前の罪を消してやらうとの御心かと存じます。といふやうな言葉の交換があつた後、メルヴィルは十字を切り然らば神壇に御身を犧牲としたまへ、御身の血より流れ出る血は、犯された血を洗ふであらう、これにて罪業悉く消滅、最後の淸い一念により來世の幸福疑ひ無しと、聖餅を渡し卓上の杯を捧げて默禱しこれを與へむとすると囚人なればとて拒む手付をする、乃でこれは法王より賜はつた神の血であれば、頂戴あれと云ふ女王受けて飲む。この上は、あなたには、天國に神と御合體遊ばすであらうと云ふ。間近く物音がしたので、急いで、頭巾で頭を隱し、戸口にゆき、禱りをしてゐる女王に近づき、これか

ら生ずる苦しみ憎しみに耐へ得られると云ふ自信をもちますかと云ふ、女王が耐へ得ると應ず、然らばライスタア、ブルレイ二卿に御面會あれと云ふ。第八場、ライスタアは、良心が咎めてかマリアにやゝ遠ざかつて座を占める、ブルレイが、女王陛下より何なりとかなふことならば聽屆けて得さすにより遠慮なく云へとのことだと傳へる。遺言狀を認めバウレット殿に渡しておいた故それを實行してもらひたく、又、家臣等をいづれも望みの地へお送り下さいますやう、なほせめて魂だけは、この忠義者のメルヴィルが佛蘭西へ持歸ることをお許し下さいと云ふ。いづれも左樣取計らうその外にはと云はれ、英國女王陛下へは、つい、一時の怒りに任せて、おのやうなことを申し上げた失禮をお許しあるやう御傳へ下さい、妾を死刑に處せらるゝとも露、お怨みはいたさず、それを心から許して上げます、そして御世長久に在しますやう祈つて死ぬると申し上げて下さいと述べ、バウレットに向ひ、長らくお世話になりましたその上、老先の短いお前がたよりにして居た一人の甥を、妾の

ことであの世に旅立たせ氣の毒で耐らない、どうぞ怨みに思つて呉れるなと云ふ。第九場ハンナ等が駈け込み、刑吏等入り來る、マリアが、メルヴィルとハンナとを刑場に伴ふことを許してくれとブルレイに乞ふ、許さない、ボオレットが許してあげなさいと云ふので漸く許す。マリアは聖像を取り上げ、十字架上におのばしになつた腕を、どうぞ妾におのばし下さいと願ひ、しづかに用意された刑場へ行かうとして、ライスタア伯をみて、倒れむとする。伯が抱いて支へる。お約束の救ひ出しの手でなくて、今、こんな際に、お手をお貸し下さいますのですか、妾は、救ひ出されたらばあなたと夫婦の契を結ばむと心に待ち構へてゐましたのにそれも弱い心の迷ひ、死んでゆく身にはそんな夢は消えてしまひますよくもお欺さなさいました、エリザベット女王の御機嫌を損じないやうに御心をかけて、御健康にお過しなさい、二人の女王を手に入れようとなさつたお方に神の刑罰が加はらねばよいがと案じますと云つて、刑場に去る。第十場ライスタア、良心の呵責に耐へず、戸外に逃げむ

とすると戸が閉つてゐるので、そこに立つてゐてマリアが最後のほがらかな祈の聲や、斷頭臺の樣子を手にとるやうに聞いて、そこに卒倒する。第十一場、エリザベットが一人、刑は執行されたかと不安の體、第十二場、女王がライスタアとブルレイとの所へ人を派してどうしてゐるかを見せしめたら、二人ともロンドンには居ないと復命する。それで、女王は二人が刑場へ行つたのだと推量する。第十三場、タルボオトが女王の許に入り來り、マリアの臣二人が入れられてある檻を訪うて、監視人の拒絶を叱して入つてみると、キアアルは、僞證をしたのだ、女王に似せて僞筆をしたのだと狂氣してしまつた再び調査を命ぜられたいといふ。女王がそれを聽く。第十四場、ダヴイゾンを呼んで、女王は死刑宣告書を返してくれ、再び調査しなければならなくなつたといふ、ダヴイゾンが、ブルレイが持ち去つたといふ。第十五場、ブルレイが入つて來る。女王は、ブルレイとダヴイゾンの二人を獄に投せよといふ。タルボオトが、十二年間御預りした御璽を今こそ御返上致しますと云ふ

女王は、たつた一人これから頼みにしたそなたまでが見棄てるのかと嘆く、この先き御世は御繁榮でございませうとタルボオトが皮肉を殘して去つてしまふ、女王は入り來つたケントを認めてライスタアを直に呼べと云ふと、ケントが、ライスタア伯は佛蘭西へお渡りになつたと云ふ所で終つて居る。

シルレルの戯曲「オルレアンの少女」

シルレルは、「マリア・スチユアルト」を書き終つてから、直ちに、「オルレアンの少女」Jungfrau von Orleans を書きはじめ、翌、一千八百一年四月十五日完了した。

「オルレアンの少女」とは、一千四百十二年一月六日佛蘭西國ロオレン州の一寒村ドンレミイ村農夫の娘、ヨハンナ（佛名ジャヌダアク Jeanne Dárc）が、一少女の身を以て、危急の佛國を救ひ、英吉利國の軍勢をして避易せしめた事跡を材料として作つた傑作である。シルレルの筆は、史實とは、多少の差があるが、今史實を擧げて梗概に代へ、シルレルの該戯曲の順序をその後に述べることにしよう。一千三百二十八年佛のフリツプ四世の男系絶え姪フイリツプ六世が王位に登つた。これより前、英王エドワアド三世アイルランド、ウエエルス、スコツトランドを併せ全國を統一し其上に君臨しその母、フイリツプ四世の女なるを以て佛國に王たらんとし

た。併し、佛國民は英王を戴くことを快しとせず、所謂百年戰爭が一千三百三十九年に初まつた。佛王ジャン捕虜となるに及び佛の西半を英に割讓した。英王ヘンリイ第五世に至り一千四百十五年佛に攻め入り、アジエンクウルに佛軍を敗北せしめ、佛の過半を陷れた、國王カアル（チャアルス）七世は外冠内憂の爲め即位するを得ず、巴里も敵軍に落ち、母后まで英軍に味方し英王ヘンリイ第六世は巴里にて英佛兩國王に立てられ、佛國人が生命とたのむはたゞオルレアン市のみであり、この市にして陷らば、最早、英國に下らざるを得ない佛國の最大危難が迫つた際、佛國側には、いよ〳〵不利のことのみ增し、孤城落日、今は戰ふ勇氣さへ消へうせたる折に突然、ジャン・ダアクなる一農夫の少女僅に十六歳なる者が現れ、生地の奉行の許に到り、妾に軍兵を與へられよ佛國を死地より救ひ出さうと願つた。奉行は狂人と見て少女の叔父を呼び出し、この我儘娘を打つたゝいてその傲慢をこらせよと云つた。後、狂人と罵られ乍らも素志を棄てず、オルレアンに向つて走り、書を皇太子

にませて、英人を撃ち退け殿下をレエムスに導き奉り即位式を擧行するまでに至らしむるやう天命を受けて居る旨を報じた。皇太子は此の書を受けて左右に示された、左右の臣下は一笑に附して顧かつたが、萬策盡きたる時とて大膽不敵なる言を吐く少女は狂か愚か一度朝廷に入れて、如何なる者か見て呉れむと寧ろ興味を先にして呼んだ。而して、臣を高座に坐せしめ太子下位に臣家の服を着けて諸重臣列座せる間に導いた、然るに少女は、直にそれを覷破して、眞の皇太子の前に脆いたのみならず、皇太子が、ひそかに一人神に誓つた言葉を言ひ當てたので、はめじて、神の使命を帶びたる少女ならむと動かされたる者もあり或は魔法使ならむとて、種々これを試したれども所信巖の如く固きを覷、大學の博士にこれを檢せしめた、博士等もまた動かされたので、少女は皇太子の許に歸り、軍の指揮權と兵を委ねられた。彼女は神の命に從つて白絹の旗を造つた。これは今日なほオルレアン府廳に保存せられてあるとか。彼女は田舍より出たばかりであるのに、早くも幾多の猛將烈士を

して、手脚の如くに動かしむるに足る威と愛とを備へた。オルレアン市民は天使の來降として熱狂して彼女を迎へた。その時は一千四百二十九年十一月二十九日であつた。英軍とその市とは交戰既に七ヶ月であつた、少女は直に、英將に向け、速に此地を去れ、然らざれば餘儀なく擊退せむと申込んだ、命旦夕に迫れるオルレアン市側の軍から、こんな書面を受けて、冷笑して、惡口を少女に報いた。少女は五月六日、大いに英軍と戰ひ自ら陣頭に立つて士氣を鼓舞し破れむとする佛兵を纏めて突擊し、敵を破り、翌七日敵の本壘に迫り、一度胸に敵矢を受けしも屈せず、敵また、勝敗此の一戰に在りと死守したが少女の軍に抗し難く翌日此の要砦を空しうして逃げた。漸くオルレアンを敵軍の手より救ひしと雖も、英軍の勢は佛蘭西を壓して居たので、佛蘭西軍の殆んど全部は、この愛らしい少女が思ふ如き、レムスの都を取り返し、そこにて皇太子の即位式を行はむなどゝは、夢想もせなかつた。然るに少女は、兵を勵まし、敵軍の依れる三要地を一週間に奪つた。かくて皇太子は、

少女の目的通りにレンスに於て戴冠式を行ひ得た。此の一事は佛國民に多大の影響を與へたことは云ふまでもない。かゝる少女も、君側の臣の憎む所となり、軍隊の指揮から退いた。英軍は、又、勇氣を回復し佛軍これに競ひ得ず、少女は、汝は捕はれて殺さるべしとの神の暗示を得たと傳へられる。カンビエエニユ役遂に捕虜となり、一度、逃亡を企て一條の革紐にすがりしにその紐の切れし爲め墜落して果さなかつた。英國側は、この少女に魔法使の名を被せて死刑にすることにした。佛國の司教コオションなるもの英國側より提供せむと云ふ利益に眩惑して、死刑を宣した。彼が獄舍に在るの間は、實に名狀し難い虐遇を受け、果ては、無實の罪に、火刑に處せられた。彼女は何とかして刑罰に處せんとして調査したる際の彼女の陳述が今なほ保存されてあるのを視ると如何に少女が高潔にあつたかを知り得られると云ふ。死んだ時は十九歳であつた。

序幕は四場にわかれてある。一括して大要を云へば、片田舍、左手に大なる樫の

古樹、右手に聖母の祠、農夫チバウ・ダアク、その三人の娘、三人の娘を戀してゐる三人の牧羊者と在り、チバウ・ダアクが、三人の牧羊者に向つて、英國軍が押しよせて來て、巴里がそれを歡び迎へたといふ有樣で、吾々の明日は、英國人の指揮をうけるやうになるかも知れない、國王陛下にも御氣の毒に流浪の御有樣、憎らしいのは御從兄弟の公爵で敵方に加はられ、御母后も吾子を敵にせられる世の中、安々としてゐられない故、娘の身の上も早く取極めておきたい、エチエンヌ殿はマルゴオ・に、クラウド・マリイ殿はルイゾンに思召しがあることを兼々氣附いて居る、どうだ、この際、早く結婚式をあげてくれまいかと云ふ二人が承知する。末の娘ヨハンナに、姉の二人は明日結婚をするのに、お前はどうしたことか、こゝに御座る、村中の評判のよいレイモン殿に思はれてゐながら、承知したらしくもない又、外の若い衆が袖を引いても、横に頭をふるばかり、こゝらで一つ取りきめて老人を安心させてくれまいか、山や野の淋しい所へ夜の明けない前から出て一人で、羊にかてま

れたりして居るのが心配の種だ、そこの大きな古い樹蔭で、うつとりとしてゐるのを度々見掛ける。あんな所へ、行くぢやないぞ魔が取りつかぬものでもないといふ。レイモンが、ヨハンナさんは、無邪氣で心が高潔で姉さん達にも柔順で、廣野で、羊等が、慕つてつきまいふ所を見ると神々しいと賞めるベルトランといふ農夫が、そこへ美しい兜を持つて歸り、農具の鐵物を買ひに出たら、オルレアンから逃げた人の話で大騒ぎその時、一人の女が、この兜を購つて呉れと云つて押し突けるので手に受けるか受けないに、混雜で、その女を見失つたといふ。ヨハンナはその兜を貰ひ受ける。ベルトランは、敵が、ロアル河の彼方一帶を占領し、オルレアンに迫らむとして居り、皇帝の御母后は、甲冑に身をかため、陣營の中に在つて、わが子の攻撃軍を奬勵なさる又、英軍のリオネルやファストルフは男と見れば誰でも構はず打殺し女とみれば直に辱しめる、そして皇太子殿下には、防禦せむにも頼むべき將卒に乏しい、ボオクウルラル市も、ブルグンド公に降ることになつたと云ふ。ヨ

ハンナに神靈がうつつたか、急に、樣子が一變して、月の圓かにならぬ前、麥の黃ばまぬその前に英國の一疋の馬にさへ、ロアルの河水を飲ませないようになさでやまうか。神の御救ひあるからには敵はオルレアンにて敗北しようと呼ばはる。父親は、いよ〳〵惡魔がのりうつつたと嘆く。

第一幕、第一場皇帝の行宮、ヅノア伯と近衛武官のヅシャッテルと語つて居る。伯爵は敵の重圍にオルレアンが落ちて居るのに吾君には、安閑と、美しいアニエ・ヅレエと酒宴をなされるやうでは、詮方もない故、身を退くと憤慨する。第二場、カアル王出御になつて、やかましい近衛大將が辭職して嬉しいと語らる。ヅノア伯がかゝる危急存亡の秋に、彼の辭職を見るは實に吾君の爲め惜しいと嘆く、皇帝は、そちは彼と平生不和であつたではないかと云ふ。平生は兎まれ角まれ、こんな際には惜しいと云ふ。王は、ルネ老公から寄越された使者は世にも稀なる伶人故、優待して、一々に黃金の鎖をとらせよと云ふ。御金庫に一片の黃金もないのに、そんな

ことを仰せられては困ると諫言する。第三場オルレアンの市會議員が來て、十二日間に援兵を送らねば降伏の外はない、味方の雄將は大底討死したと言上する。スコットランドの備兵も敵方に附かんとする意嚮を示したと聞いて、吾軍の不利が一層明白になる。第四場王の寵姫アニエゾレエが、寶石や黄金を入れた小筥を持つて出てこれ以外に莊園プロヴンスで金を借りて軍隊に與へてくれといふ。王はその態度を喜び、一人の女性が出て、敵を亡し、王冠を此の頭上に得させると尼が豫言したが、その女こそ此れだなと云ふ。第五、六、七場、帝から從兄弟ブルグンド公の許へ使に遣つたラヒイルが歸つて來て、公には、どこまでも英國側に味方する。父の仇敵ヅシャッテルを此方へ手渡しすれば考へもしよう、それが出來ねば明日、オルレアンの戰ひにお目にかゝらうと嘲笑したことや、議會が敵方に附き、又、巴里では幼弱なランカスタアが聖ルウドキッヒの御座の椅子につき母后が、狂氣の先王の愚鈍の子を王位から蹴落し、この立派の若芽を据えた妾のはからひを佛國民よ感謝

せよと云はれたと承つたと言上する。王は、それを聞いて、意氣頓に阻喪し王位を放棄するといふ。アニエゾレエとヅノアが、オルレアンに據つて戰ひ給へと勸める。王が承知しないので、伯は故郷オルレアンに歸り討死しようと退く。ヅシャッテルは、自分をブルグランド伯に渡して和睦したら、何とか道が立たうからと身を忠義の爲めに捨てゝかゝる。主君はそれを聽き容れない。第八場、ヅノア伯と一緒に君の前を出たラヒイルが歸つて來て味方の、大勝利を報じ、オルレアンの使者議員を叫び歸して下さいと云ふ。第九場、ライムの大僧正伯爵、ヅノア伯、ヅシャッテル、騎士ラオウルが現る。ラオウルは、吾々王軍に加はらむと、ボオドリクウルを將と仰ぎ十六隊を編成してヘルマントンの岡近くヨハンヌの溪間へと降つた時、廣野に大敵の要するを見、後をみればそこにも、敵兵、既に寄せたる故進退谷まり、降を乞はむとした折から、森の方より一人の少女が、兜を輝かし、戰神の如くに忽然と現れ、敵兵いかに多くとも恐るゝに足らずわれこゝに味方の勢を導かむ爲めに現れ

たと呼び、一騎士の手より旗を取り、兵士の先頭に立ち威風凛々しく、馳せ進んだ、敵は、忽ち恐れをなし二千餘人或は溺れ或は傷き見苦しい敗北をしましたに不可思議なるは味方は一人も失はなかつたことでございますと物語り、その人間とは思はれぬ一少女は程なくこゝに參るであらうと云ふ。王は面會する前に少女を試してみようと、ヅノアを上席に置き自、下位に臣下らしく裝ふ。第十場少女は議員騎士などを從へて入り來る。ヅノアが、王らしく見せかけて、敵軍を追ひ退けた少女といふは其方かと云ふと、ヨハンナは、オルレアンの庶子、あなたは、そんな席に居て、神を試さうとなさるゝかと云ひ、眞の王に向つて、吾君には昨夜、宿直の人々皆眠れるに、一人神に祈禱なされたであらう、その御祈禱はかゝるもので御座つたらう、といふ、王は驚き、少女が、オルレアンは敵に降伏しない妾がこれよりライムに案內致さう、佛國を王の統治の下に置かうと云ふ言葉に勇み立ち、近侍の諸將も意氣急に加はる。少女は王に神の御告げにより、古き都、フキルボア●サンクトカタリン

寺の分捕品中にある劍を取り寄せたまひ、又、白旗を作り、その旗には、エスを抱き球上に立てる天の女王を畫きたまはれといふ。第十一場、英國側の使者が來る、ヨハンナこれに應對して、勇氣と、敵方の事情に通じてゐるのとで、使者の心膽を寒からしめる。

第二幕、第一場巖石の疊み重なつたる場所、タルボオト（英兵の將軍）リオネル（指揮官）ハストルフ（指揮官）佛人にして英國軍に味方をしてゐるブルグント公爵とその騎士シャチョンその他の兵士が旗の風に靡く下に居る。タルボオトが、心がゆるされぬと云ふリオネルが、たゞ一少女の爲めに醜い敗戰はどうしたことかと嘆く、タルボオトとブルグントとの間に激しい舌戰がはじまる。內心カアルに和睦を計つてゐる貴公の心事は知つてゐると云はれてブルグントが怒る。第二場、女皇イサベルが小姓をつれて現れ諸將の不和をなだめる。諸將は、女皇に早く巴里に歸つてくれ、こんな所へ來てくれるのは有難くないといふ、女皇が諸將を屬る。第三場諸將

か、明朝、あの少女を取り挫がうと云ふ、第四場、巖かげから、ヨハンナは、女らしい服装の上に兜と胸甲を附け劍を帶び手に旗を携へて、ヴノア伯、近衛武官のラ●ヒイル外騎士兵士を隨へて靜に岩のかげから現れる。第五場英兵が少女の接近したのを知つて逃げ騷ぐ、タルボオトが現はれる。第六場、英軍の陣營が燃え上る。モントゴメリイが逃げて來る。第七場ヨハンナとモントゴメリイと逢ふ、モントゴメリイ殺さる。第八場ヨハンナ、一人考に耽つて居る。第九場、ブルグンドが現れる、ヨハンナこれと戰ふ。第十場ヴノアとラ●ヒイルが、少女に代つて戰ふ少女ブルグントを說いて心を飜して佛軍に屬せしむ。

第三幕、第一場マルネ河のほとり、シャロンの行宮、ヴノアと、ラ●ヒイルとが、ともに、ヨハンナに懸想して自分の妻にしようとして爭ふ。第二場帝、寵姫、アニエ●ゾレエ、ヴ●シャッテル、シャチヨン等が入來る。第三場、ブルグント公（フイリップ善王）ヴノア伯、ラ●ヒイル、チヤチヨン及び公爵附の二騎士等が現はれる。

ブルグント公等ははじめ戶外に立つてゐる。王が彼に向つて禮をすると、公が君の方に進み、互に抱擁せむばかりにして、骨肉相背反したことの不善を悟つた强い親しみが兩者の間に流れる。第四場、ヨハンナが武裝のまゝ和睦の席へ現れ、ブルグントから仇敵視せられて居るので、この席から退けられてゐる所の、騎士ヴ●シャッテルを呼ぶことの許可を得て、招き込み、又、和睦させる。王は、少女の功勞を感謝し、佛國の名門と結婚させようといへば、ヴノアが何卒自分を配してくれといふ、ラ●ヒイルが、否、拙者をこそと願ひ出る。アニエ●ゾレエが、女の妾に委せて、この場で決しないでくれといふ。少女は、神より任された大任を果すまでは、そんな事は毫も心に留めない。早くレムスへ進軍の用意をと促す。第五場一騎士が急ぎ入り來り、敵軍が、マルネ河に近づいたといふ。ブルグントが、我も御伴仕らむと云ふ。第六場田舍、樹の間を兵士が退却する。タルボオトがフアストルフに助けられて、傷を負つて現はれる、多くの兵士が隨ふ。指揮官リオネルが出て來る。リオネルが、

巴里は、カアルと和睦したと云ふのを聞き、タルボオトが殘念だと死ぬる。カアル帝、ヅノア、ブルグント等が現はれる。フアストルフが捕虜にせよと云ふ、帝が許す。第八場、ラ●ヒイルが、少女と、わかれたと云つて現はれる。ヅノアが、狂氣のやうに、少女の身の上を案じる、ブルグンドが、敵の中に少女の旗を今しがた見たといふ、救はねばならぬと彼等が急ぎ去る。第九場、黑い甲冑で、瞼甲に顏を隱した騎士が現れて、神の御告げだ、レムスの市まで行くなと云ふ、少女が、汝は、神の言葉を詐る曲者に相違あるまいと叱責すると、姿を隱す。第十場、リオネルが現れ、憎むべき少女、今こそこの刄にかけて呉れん、戰の用意をせよといふ、少女刀を拔いて戰ふ、剛勇を以て知られて居る英軍指揮官リオネルも、少女の劍で、持つたる劍を落されて、かくなるからは組み伏せんと抱きつく、ヨハンナ彼が兜を掴むと見えたが、兜は少女の手に忽ち割かれた、右の手の劍を、リオネルの頭に加へんとして、はじめて美しいその顏を見て魅せられたる如く手を控える。そして、早く

早く此の場を逃げたまへと手を放し、あゝ聖母、あゝ聖母、妾は、お誓を破りましたかと嘆く、リオネルは、さては己、一人を助けむとするか、おゝうるはしい若い少女、憎しみも消え失せた。われも御身を救はでおかうやと云ふ。少女は、あれに見ゆるはヅノア樣達、妾を救はむと近づかれる。もしも彼等が手にあなたが失せ給ふならば、妾も生きては居られませぬ、早う去つて下さいませと云ふ。リオネルは、我を愛したまふか、さらばまた相見るまでのしるしに此の劍をと近づく、ヨハンナ急に元氣を出し、ならぬ〳〵お控えなさいと強く云ふ。リオネル去る（第十一場、ラ●ヒイルが、あそこに彼女が居る、彼女は生きて居るとヅノアと共に飛んで來る。ヨハンナ仆れむとする、ヅノアが、手傷を負はれなさつたわいと云へば、ラ●ヒイルが、血が流れる血が流れると云ふ、ヨハンナが生命も流れ出て終へばよいと今まで曾て漏らしたことのない弱い音を吐く。

第四幕、第一場、戰勝祝ひの用意の成つた廣間、柱々に旗が掛けられて居り、笛

樂器(ポイ)などの樂器が鳴つて居る。戰勝の祝歌や、舞踏の響が聞こえて來る所で、ヨハンナは、たゞ一人物おもひに沈んで居る。どうして、あの時、あの人を見たか、どうして、あんな心が湧いたのか、つひあの人の顏を見たばかりに此んなことになつた、いつそ、英國の軍隊へ逃げて行きたい。こんなことになつてしまつたのだからと戀に心を痛める。第二場、アニエ●ゾレエが、ヨハンナの許に來てヨハンナの首にうれしさうに抱きつき、やがて、ヅノア伯が、あなたに對する熱烈な戀をきゝとゞけて上げて下さいと云ふ、妾は汚れて居りますから、どうぞあちらへお行き下さいとヨハンナが云ふ。第三場ヨハンナの旗を持つて、ラ●ヒイルが來り、それをヨハンナに持たせようとすると、少女は後退りして、恐怖の態度をなし、嗚呼、聖母樣には、あのやうな鋭いお眼を以て、妾を御覽になる。妾の罪を罰し給ふとて天降られたのだ、誓ひを破りました妾の首を、どうぞ御碎き下さいませと云ふ。併しラ●ヒイルの取れといふ旗を恐る〳〵握つて、ヅノア伯やヅ●シャッテル等と共々に即位式

場に入る。第四場、即位式の音樂が聞える所に、その行列を拜觀しようと多くの人民が集まつて居る。その中に、ヨハンナに兜を與へたベルトラン、姉の夫クロオド●マリイ、姉のマルゴオ及びルイゾンも居る。第五場マルゴオとルイゾンが群衆中に、親しい夫や村人を認めて互に近づく、ベルトランが、行列は段々近づいたと云ふ、ルイゾンがマルゴオさん、妾、妹ヨハンナの顏を見ることが出來るかとおもふと胸が動悸で靜まりませぬと告げる。第六場、樂器を持つた樂人を先頭に、行列が近づく。第七場、ルイゾン、マルゴオ、クラウド●マリイ、エチエンヌ、ベルトランが、今にも、懷かしい、ヨハンナがどんな顏をして眼前を通るかと待つて居る。第八場、ヨハンナの父なるチバウが、黑裝束で、出て來る。そのあとに、ヨハンナに懸想してゐた青年レイモンが、附いて來て、老人が、行列間近く行かうとするのを止めようと努める。ヨハンナの父は、どてまでも、娘には、槲の木の所の惡魔がのり移つたものと思ひ込んでゐるから、惡魔の不正なしわざから、正しい神へ娘を引出さう

とするのである。さうしなければ、帝王に對して父としての道が立たないと思ひ込んでゐるのである。父は娘の顔をみて、物に恐れたわの顔付を、レイモンお前は見なかつたか、いよ〳〵彼女を救ひ出さねばならぬ時が來たと云ふ。レイモンは、娘御の身に益ないことをなさるなよ、と注意すると彼女の靈魂が救はれるなら形骸はどうなつてもよいと云ひ放つ。第九場旗を手に持たずに寺の門を出たヨハンナを群衆が取り圍んで、衣に接吻を浴せる。父は良心の呵責に耐えで寺から脱け出したのだと云ふ。マルゴオが近づいて、おゝ妹よと呼びかける、ルイゾンが姉さんと抱き附いて、昔のやうに、妾達を忘れずにやさしいと喜ぶ。ヨハンナは、わかれも告げず飛出した妾を憎いとも思はれないか、お父さんには、家出を、大層御氣に病まれたか、あの緣の野で羊を飼つた頃が懷しいと云ふ。クラウド●マリイ、エチエンヌ、ベルトランが、此の有樣をやゝ隔れた所で見てゐる。ヨハンナは、妾皆樣と村へ歸りませうと云ふのを聞いて、ルイゾンが同意する。第十場、寺院から即位式の禮服

で帝王が出御になる。アニエ●ゾレエ、大僧正、ブクグンド公、ヅノア伯、近衛武官のラ●ヒイルとヅ●シヤッテルその他の騎士朝臣が續く、皇帝萬歳の聲が鳴り響く。皇帝は、少女にこの祝日に當り御身もし婦人の腹より生れたのであらば、その名を我に明されよ、然らずして、天國より少女の姿と化して來りたまひしものならば、神の姿を示したまはれ、御身の前にぬかづかむと宣らる。人々眼を皆少女の上に注ぐ、ヨハンナは、天を仰いで、わが父、神よとのみ云ふ。第十一場、群衆中から、ヨハンナの父が前に出て、かしこくもわが帝王はじめ、御左右の御方々は、地獄の力によつて救はれ給うたのである。此の娘は、わが村の古い木蔭で、怨靈に取り附かれたのでございますどうぞ甲冑を取り外して御檢査下さい破滅の印が附いて居ようと熱心に述べ立てるので、ブルグント公は、やゝ父の言を信じたが、ヅノア伯は信じないで、少女を疑ふ者は誰とでも決鬪しようとまで主張する。大僧正が、少女に、疑惑がそなたに掛つたからには此處で、身の證明を立てよと勸める。その時、

急に天上に雷鳴が起り、轟々と物凄いので、皇帝はじめ人々は、そこを去る。ヅノア伯が一人殘る。第十二場、ヅノア伯が、少女に手を差伸べても、少女は、これを受けない、伯が茫乎として立つ。第十三場、ヅ・シャッテルが來て、ヨハンナ殿には此の場よりこのまゝ自由に鄕里へ歸つて差支ないとの御許しがあつたと傳へる。ヅノアも、ヅ・シャッテルに伴はれて去る。この時、農夫レイモンが近づき、ヨハンナ殿、私とともに歸らうと云ふ。この時はじめて、夢から覺めた如き樣子をして、天地を眺めた少女はレイモンの引くまゝに歩を運ぶ。

第五幕、第一場深林の夜の闇、物凄く砲聲が響き雷鳴が轟く、炭燒小屋に夫婦が、英國の兵どもは、手痛く破られたのに又もこのあたりまで迫つて來たのは、あの少女をレムスで魔法遣ひにしてしまつたので、敵兵は、あの少女さへゐないならば、王樣の軍勢なんてちつとも恐ろしくないと元氣づいて、勢烈しく攻め込んで來たなどと語る。第二場、少女の手を引いて、三日三夜さまよひ通しのレイモンが炭燒小

屋に近づく、第三場、炭燒女房が、女の身で甲冑を召して居られるからは、王樣の軍勢を探されるのでござらうが、危うございますよ、既にこのあたりは英國側の手に落ちて、近い所にその陣所もあります、こゝをお逃げなさるのならば、間道からでなければ見つかるのが必條でございます、息子に案内させますほどに、その間道から、お逃れなさいと云ふ。そこへ外から、息子が歸つて來て、父と母とに、あの少女こそ有名なオルレアンの魔法つかひだ恐ろしいと云ふ、炭燒三人あわてゝ逃げ出す。第四場、少女はレイモンに、どうぞあなたも、逃げて下さいませといふ。レイモンが、あなたも、かうなつたからには、罪を悔い改めて下さいと泣かむばかりの樣子で云ふ。少女は、あなたも、妾を魔法遣ひと思つて居なさるのですかと云ふ。さう思はれるに無理はない。證明(あかし)を立てよと云はれた時、あなたは默つて居たではありませんかと咎めると、少女は、それも神樣の思召しに從つたのでした、レイモンさん、安心して下さい、妾はまたこの曠野で、心強くなりましたと云ふ。第

五、六の二場は、英國側に味方しわが子を敵としてゐる女后が兵を引率して現れ、反抗するも無益だ、そちは既に捕虜の身ぢやぞと云ふ。少女は、少しも恐れず、女皇の云ふまゝにならうとする、レイモンは驚いて逃げる。女皇は、兵士をして、少女に縄をかけしめ、そちは、何故佛國の軍營を離れたかと問ふ、追放せられたのでございますと答へる。女皇は家臣に、この女奴を、早々リオネルの陣營に引き行けよと云ふ。リオネルと聞いて、少女は、その陣營へ運ばぬ前に早う殺して下さいといふ、リオネルは、曾て戰の最中に、その容貌の秀麗を以て少女の心を動かしたのであるから、そこへ行くことを避けたいのである。兵士は、構はず、追ひ立てゝ行く。第七場、佛國の陣營、大僧正とヅノア伯と、ヅ・シャッテルの三人が居て、ヅノアに向つて、大僧正が、先づ〳〵お怒りを靜められよと云ふ、ヅノア伯が、あの少女を魔法つかひだと、追放したが惡いと猛り立つ。ヅ・シャッテルが、御怒りはさることなれども、かゝる場合、我々を御見棄てあるなと云へば、第一に少女を疑つた

のは足下ぢやでざらぬかと詰る。大僧正が引きとつて、今では、帝をはじめ、ブルグント公、ラ・ヒイル殿等いづれも御後悔の事で御座る。あゝ、全能なる神よ、願くば奇蹟を以て、疑惑の雲を拂ひたまはれと祈る。第八場、突然一貴族が入り來り、ヅノア殿、少女の許より來つたといふ年若い羊飼ひが貴殿に拜謁を願つて居りますると告げる。ヅノアが、なんといはるゝあの少女の許よりとな、早速面會致すでござらうと云ふ。その年若い羊飼ひはレイモンである。彼はヅノアに、あの少女は魔法つかひではありませぬ。然し乍ら女皇の手に捕虜の身となりましたればお救ひを願ひますと告げる。ヅノア伯が、そは一大事、一日も猶豫なり難し、者共、出征の用意を致せと呼ばはる。第九場、英國軍の物見の樓上に、ヨハンナ縛られ、その側に、リオネルが控えて居る。フアストルフが走り來つて、リオネル殿、今や民も兵士も、一刻も早く少女を殺せと熱狂して居りまするぞと詰るやうと云ふ、女皇イサボオも來つて、早く殺せと、人民どもの希望でござる、疾く命をお絶ちなされと、

我慢なりかねるやうな身ぶりをして急き立てる。リオネルは、騒ぐならば騒がせてお置きなさいと云ひ、少女に寄つて、よい程にあきらめて、拙者が心に從へよ、拙者に肌身を許すと一言誓ふならば、名も望まず、位置も顧みず、そなたを助けて、逃れ出ようぞと、熱心に口説けば、ヨハンナは、それでも眞の男子かと云ひ放つ、汝が友は汝を見棄て、恩を忘れて救助の道さへ立てないに、自國の民に背き、味方を裏切り汝を救はむとする眞心を何と見る、いつか戰場で、何と云つた、よもや忘れたとは云ひ得まいと聞きも終らず、眞心をもつて愛するといふからには、英國の軍勢を佛國の境界より遠くに早く去らしめよなどと高く云ふ。女皇が聞いて、捕虜の身であり乍ら、大膽と云はうか狂人沙汰と云はうか、命令を下さうとするかと怒る。ヨハンナ屈せず、女皇を脅す。第十場、急き込んで一司令官が入り來つて、佛軍は雲霞の如くに押し寄せたと云ふ、リオネルが、よしや如何ほど寄せくるとも、この少女だにあらざれば二十餘戰悉く、負けて逃げたる佛蘭西軍、何の恐るゝこと

があらう、ファストルフよ、これより戰場に駈け向ひ、追ひ散らして呉れむ、女皇陛下には此處に止まり、五十餘人の騎士とともにこの少女をお見張り下さいと賴み、少女に、逃亡しないと誓へと云ふ、逃亡を願つて居ると答へる。

第十一場、女皇は逃亡を氣遣つて、三重の鎖で縛める。ヨハンナは、縛められて身の自由は、かなはなくとも魂は戰場を駈け廻ると云ふ。女皇は、望樓に兵士を上らせ、戰場の有樣を聲高く告げしめ、女皇自らは劍を拔き、少女の眼前に閃し、味方が破れかけたと聞いては、首を斬らうとし、勝つたと聞いては引く、兵士は佛軍の不利を報ず、少女は、膝を動かして、嗚呼、神樣、神樣、妾をばこのまゝお見棄てなさるかと悶える。兵士は聲高に、こなたを差して騎馬武者一人、重傷を負ひ乍ら參らるゝは、ヅノア殿と見うけまするとと叫ぶ。こゝに至つて、ヨハンナは、齒を喰ひしばつて、あゝ妾は、縛られた、普通の女か、と痛嘆する。兵士はなほも、緣を黄金の色にて飾つた空色の衣を着けたるは何人かは知らないがと云ふ。少女は、

それは、わが帝王なるにと身をふるはす、兵士はなほも續けて、その人の騎れる駒が動かない、進めよ、そこへ我兵早くと云ふ。ヨハンナいよ〳〵耐らぬ顏色をなす。女皇は吾子の危急を聞いても平然と、少女を見て嘲笑し、佛蘭西の救ひ主ヨハンナや、今が肝要な時ぢやぞと口を尖らせて嘲る。ヨハンナは神を祈る。兵士は、勝利勝利大勝利、吾兵は王を捕虜にしたと一層大きな聲で云ふ、ヨハンナ躍り上り、神樣お惠みをと云ふかと見えたが、瞬く間に鎖を切つて兵士の劍を手に取るよと見えたが姿が消えた。第十二場、女皇呆れて、漸くわれに歸つて、彼女はどうしたか、夢ではないかといふ。兵士は、不思議にも、あの少女は、早くも戰場に現れて、目覺ましい活動を示して居まする。あれ〳〵あの少女の向ふ所、そりや人間業ではありませぬ。散り〳〵ばら〳〵になつた兵を集めて、直に隊伍を編成して味方に向つて突擊してござります、早、王をば重圍の中から、救ひ出しました。ファストルフ殿にも、落馬なされ、捕虜となられでござります。女皇樣には、いざ〳〵早くこの

場を落ちさせたまへ、敵軍間近く押しよすと叫ぶ。第十三場、ラ●ヒイル兵を率ゐて入口に立ち、女皇陛下かくなる上は速に歸順致されよと云ふ、カアルに合す顏はない、彼の居ない所ならどこへでも伴れてゆけと云ふ。第十四場、兵士が旗を風に靡かせて立つてゐる前に、カアル陛下とブルグント公が立ち、重傷のヨハンナを支へて居る。ヨハンナの生命は今にも絶えんとするらしい。アニエ●ゾレエが來て、カアルの胸に顏をあて、生きて在したか、嬉しやと云ふ、帝は、少女に目を轉じて、それも少女が必死のはたらき故だぞと云ふ。アニエ●ゾレエが、あゝ終にヨハンナは亡くなりましたか、ブルグント公も、あゝヨハンナはみまかつたかと眼をしばたゝく。帝は、聲を曇らせて、いよ〳〵逝つたかと問はれる。少女の顏を覗き込んでアニエ●ゾレエが、眼を開いて居りますれば、まだ生き長らへ居るのでございませうと云ふ。ブルグントが、それでは、少女は死をも征服したか、おゝ起き上つたと云ふ。ヨハンナは妾はどこに居るのですと尋ねる。公が、殊方の中に、友達の間にと云ふ。帝

も、うれしげに、そなたの友に支へられ、そなたの君に抱かれて居るぞと云はれる。妾は決して魔法を以て、人を迷はせるものではございませぬ、あゝうれしや。あの御旗はどこに在りませう、どうぞ御渡し下さいといふ。少女旗を手にして立つ時、俄に天高く薔薇色の光が照り輝く。それを見て少女は、あれ〳〵天上遙に虹が現れ天つ扉は開け放たれ、神には御子を抱かせたまひ伶人共を引き具して、物やはらかにおん手をば今、妾に下したまふよ、雲は妾を運びつゝ天上さして翔りゆき大地は遠くなつてゆき、無上の快樂が身を占めます、と旗を地に落し地に仆れる。人々悲しみの情に耐へず、やがて、帝の指揮に從ひ、各々持つてゐる旗を少女の死骸の上に輕く置く所でこの戲曲は終つて居る。

この戲曲が、ライプチヒで演ぜられた時、劇場に在つたシルレルに對する觀劇者の崇拜と熱狂とは非常なもので、歸途、出口に彼に抱きつき敬意を表したものが非常に多かつたと傳へられる。

シルレルの『メツシナの花嫁』

『メッシナの花嫁』Die Braut von Messina は一千八百三年二月に完成した戲曲であつて、三月にワイマルで興行せられた。恐らく作者は、劇場主、監督などの希望する傾向なんかに構はず作つたものであつた。エエナの學生達に大に歡迎せられたと雖も、批評家の多數は、不自然であると叫び、殊に合唱曲 Chorus を用ひたこと回教と基督教との混合があることを非難した。作者は、シチリヤのことを擧げて自己辯護をした。合唱曲を用ひたことについては、此の書物の卷頭に彼が書いて居る論文に盡されて居る。彼は劇は詩的遊戲である。觀客に最高の快樂を授くるものが眞に重んずべき藝術である。その最高の快樂とは何かと云はゞ、活ける遊戲に於ける心情の自由である。觀客は多少、觀劇に依つて、自己生活の不平を慰し拘束から離脱しようとするであらうが、足一度劇場を出づるや、忽ちに、また自己を圍る羈

絆に纏ひつかれる。愉快と思つたのは瞬間的妄想であつたことを明にする。劇は一時の瞞着を目的とし、眞理の假象、眞らしき事を要とするだけで足るとすべきものか。眞の藝術は一時の通過的遊戯を目的とすべきで無い。眞藝術は、眞理の假象を以て滿足せず、眞理の上に、確固たる自然の根抵の上に理想的組織を建てなくてはならない。藝術の理想界は自然をそのまゝ描寫したゝけでは足りないとする所に在るは言を須たない。藝術品は全體としては現實的で自然と一致しなければならないが、各部分に於ては理想的であるべきだ。この二つの要求は脊反するが如く見えても然らずして渾然融和するのである。但、平凡極まる自然觀念は詩文藝術の靈を害する。悲劇に律語を用ふるは、理想的に近づく一階段である。かくすることに於て幾分抒情的發言が自由になり、詩が悲劇中に呼吸する時大にその力を發揮する。既に然りとすれば、合唱の更に有力なることは明であると云つて居る。簡疎に失して要領を得難いことを恐れるが大體そんな意見を把持して居たらしい。

彼は、希臘の古詩人、ソフオクレス Sophocles の悲劇を愛讀し、それから思ひ立つたのがこれである。合唱曲を多く挿入したのも、古希臘の悲劇に倣つたのである。祖先の罪惡が子孫に禍を來すといふこともソフオクレスのエディプス Aedipus 家のことを書いたものゝ影響に外ならない。

メッシナ王家に、先祖からいつか因果の報應として禍が起ると傳へられた。王が一夜、二本の檻欖樹の間に百合の花が咲いたが忽にしてその百合は火と化して二本の檻欖樹及周圍を燒いたと夢みた。乃で亞剌比亞の天文に精通すると云はれるものに此の夢を告げて吉凶如何を判斷せしめた所が、御家に後日一令嬢が生れるであらう、その令嬢は二王子を殺し、なほ王の一家を亡すの兆と云つた。王は、これによつて、女子の產るゝあらば、即座に之を殺せよと后以下に命じた。その後、后一夜、森の中に一少女の遊べるに獅子近づきて物を與へ、鷲又來つて小禽を與へたと夢み、これを一僧に占しめた。僧は后に媚びて、產れたまはむ姫君は二王子の不和を調停

したまふべしと云つた。こゝに於て、后は、女子を分娩するや、王に秘して一寺院に運び、そこにて成長せしめた。父王の死後、二王子は反目甚しくかくては國家の大事と、母后は二王子を王城に招いて和睦させた。この喜びの日に、なほ秘し置ける妹を呼ばむと母后がはじめて、二王子に告げた。二王子は、妹と知らずして、いづれもこの女に兼て心を寄せて居たのであつた故、戀の仇敵と兄弟互に刀を振ふに至り、大悲劇が生じる。

前述の如く、多く合唱曲を挿入したこと、原本に幕とか場とかを明に示してゐない所など、他と趣を異にして居る。

二ヶ月前に王を亡つてから、かねて仲のよくなかつた兄王子ドン・マヌエルと弟王子ドン・ツェエザルとが、なほ〳〵互に敵視して、いつ國内に矢叫び劍の音が高くならうも知れない。王にさきだゝれた女后イサベラは、故王を悼む涙の乾かない中に、家のこと、國のことを思ひ煩ふて、身も痩せ細るのである。國家の紊れを、このま

こにしておいてはならないと、二王子に母后は、やさしく説諭して、二王子が今日此の城に來て、母后の下で和睦することになつて居るので、女后は重臣達を廣間に集めて、子の前に歎願して漸く二人の子を承知させたからには、今日から、長い爭ひも消えて平和が笑ふであらう。兄弟の不和ほど不利なものはない、其方等も喜んで、二王子を迎へて呉れと云ふ。重臣達が去つたあと、從者のディエゴを近く呼んで、そちだけは、悲しい母親の胸中を知つて居る唯一人だ。亡き王の命令を守つて今日まで秘密にしてゐたが、今日この喜びの日に、その秘密を公開したい。あの娘を、母の手でしつかり抱きしめてやりたい、預けて置いた寺院へ駈けつけて、早速伴つて參れと云ふ。

喇叭の聲が近く聞こえるので、王后は、王子がいよ〳〵來てくれたと、笑顔を輝かせる。間も無く、二王子の合唱隊（コオル）が、先づ兩側の戸口から入る。青年騎士十二人を以て組織して居るのは兄の方で、老騎士十二人を以て組織して居るのは弟の方で

ある。二組の合唱隊の間に、言葉が交される。その中に、メッシナ家が此の島を征服した他國の種屬であること、その支配に甘んずる島民の意氣地無さに對する嘆きとがある。

エリザベスが二王子を左右にして前方へ進んで來ると合唱隊が、女王を讃美する。女王は、二人の子に、此の母の今日の喜びを見て呉れ、二人を愛する上に、隔ては無い。二人が爭ひでも起さうものなら、一族は潰れて終ふ。あの武裝したお前達の家來は、お前達に心から服してゐるのでは無い。此の島の人々は、內心には、此のメッシナ家に事あれかしと希望して居るので、お前達の先祖が國を奪つた怨恨を心の底深く抱いて居るのだ。されば互に心から賴み合ふに足るのは、一つ母から生れた兄弟でなくてはならない』と、熱誠を以て諭すので、二王子も感動して母の手を握る。母は、幼年の頃のことを、いつまでも根にもつでなく、勸辯するのが賢いことだと云ひ聽かせる。そして、二人をより近く接近させようと後に退くと、二人は、

內心和睦の心はあつてし久しく敵視して居たので、物も云ひ兼ね、目を横に向ける。母后は、それを見て、妾には、これ以上は何とも云はれない。母親の願ひも聽かないといふのなら、妾の前で、血を流し合つて死ぬるがよい、とわざと語氣を荒らげると、弟は、兄上よ吾、今日、吾の不心得を覺つたと下を見て云ふと、弟よ、その言葉は嬉しい。感極まつて、先づ云ふべき言葉に迷ふと兄が答へる。思へば罪深くも弱かつたと弟が云へば、否、汝の心は崇高であつた、言葉の傲慢はあつたけれどと兄が云ふ。兄上の胸にもまた似た物があつたと云ふ。其の親まうとする胸中を早く知り得たら母者人に憂を掛けることもなかつたらうにと兄が云へば、心事が陋劣で下に對して傲慢を極め、吾身に對して、不信であるとの告言は皆詐りであつたを知ると弟がいへば、欺かれて居たのだ、母上のお言葉の通りに油斷はならないと兄が云ふ、これより兄弟和合しようと二人が手を取り合ふと、一種の感情が湧き上る。かうして抱き合ふと、ッエザアルよ、その顏に母上のお顏が在るわいと云ひも終ら

ぬに、兄上のお顔にもお母様のお顔が現はれると云ふ、なほ兄弟は互に理解し合つて、かやうなやさしみの深いものを、何なれば、知らなかつたと悔ひ、今後は、一緒に離れまいと誓ひあふ。

一人が現れて御兄弟御和睦の席へ更にお悦びの通知を持つて參りましたとツエザアルに向つて云ふ。何事か早く云へといふとお命令により探してゐたものが發見せられましたと云ひも終らぬに弟は、飛び上らんばかりに喜んで、それは何よりうれしい早速案内致せ、兄上さらば後刻母上の下に對面いたしませうと氣の落付かないのを見て、待つ幸福へお急ぎなさいと笑顔を見せないで云ふ。併し今までに聽かない兄弟らしい言葉を掛けられて、年若く感激することの早い弟は、又、立戻つて、兄上の御顔を見て居るとよろこびの情が湧き出る。心も全く清まつて、生々と花咲く心地だと述ぶれば兄は、其の花に良い果が得られるとまたやさしい言葉を浴せる。かうなつたら中傷は後に退る、汝等の中、兄に讒口した奴が憎いと、合唱隊に向つ

ても云ひ、兄との抱擁から離れて出る。一方の合唱隊も隨つて出る。殘つた側の一人が、恐れ乍ら皇子様の御様子にそは〳〵なさるかと思へば何か喜びことを抱いて居られるやうな微笑を漏らされる節も交り、ツエザアル王子の熱心なる御言葉に冷淡に應對なされたのが諒解し難いといふ。それに應じて、マヌエルは、嬉しいことが胸に在る。かう兄弟和睦したからには、延してあつた婚禮も行はれる。あの天性麗はしく輝きわたる女の、此の城に女王としてふるまふさまを想ふと、耐らない。明朝、この城に伴ふた上は、今までのやうに忍び忍びの逢瀬をたのしまなくつてもよいと漏らしたので、臣下が、どこにその御戀人は居られるのかと尋ねる。されば語らう、五月前、父に御獵のおん伴して深山深くわけ入つた時ふと一頭の白鹿を認め、それを追つて、單身、谷より森、森より谷へ進んでゆき今にも投槍に倒さうとすると、鹿は一つの門内に駈け込んだ。馬を門内に進めると、一見恍惚たらしめた美しい尼が鹿を抱いて居て、じつと此方を見た、その眼の美しさ、我を忘れて見て

ゐると先方も、飽かず此方を見た。それから互に思ひ合つたと話すのを聞いて、老騎士が、恐れながら僧院の神聖をお汚しになつたものと心得るといふと、我等の戀は清いのだと辯じ、その女は、或王家の娘だといふだけしか知らない。それを知らせるのも老僕一人で、その老僕が來て、母上にお會はせする日が迫つた、明日にもならば、幸福な所へお伴れ致すと云つたと聞き、伴れてゆかれては、一大事と、その女を夜の闇に乘じてカアメリテスの僧院に近き或場所へ殘して來た。早く行つて、迎へたい。就いては、女王として身につけるやうな貴重な品を用意せよ。彼女の乘るべき馬の鞍には、金銀珠玉を輝かせ、音のよい喇叭をも取り揃へよ、汝等と彼女の所へ乘り込みたいと二人の騎士を從へて去る。殘つて、待つて居る十人が、雜談を初める。その中の一人は、二王子の父なる王は、自分の父王が妻にと選んだイサベラを自分の妻とした、それ故に、その母から出た同胞には禍が附纏ふ筈だと昔を語る。

寺から、戀人に伴れ出された尼ベアトリイチエは、海上遙に沈まむとする夕日に對して、一瞬も早くマヌエルの來るやうにと願つて居る。それ故、松風の音を、其の人の近寄る音かと、何度耳を傾けたか解らない。僧院と違つて、住み馴れない庵は何となく心細い。いよ〳〵日も沈まうとするので、僧院を逃げた破戒的行動が心を咎める。併し戀の魅力の方が強い、早くその雄々しい好きな男の胸に抱きつきたいと待つて居ると、人聲がして近づいたのは、見馴れない青年ッエザアルであつた。少女は驚き怪しんで身を顫はす。ッエザアルは、家臣を少し遠ざけ、怖れんでもよい、長い間、探したが、幸に今日、再び目前にあなたを見るのは何といふ喜びぞ。亡父の葬式の際、あなたの清麗な姿を見てから、寢ても覺めても、そなたの事ばかり思つて居た。その際、見失つてから、隨分、探したのであつたが、そなたの姿を見得なかつた。然るに幸にも、家臣の一人が、見付けて知らせて來たので急いで迎へに來た。彼等家臣の前で、そなたを妻にすることを公言する。あなたを見れば心

の清さは解る、家系が何であらうと構はない、我はッエザアルだ、メッシナだと云ふ。少女は、男の云ふ通り、曾て葬式にこの若者を見て、忘れずに居るのであるが、メッシナだと聽いて愕然とした。ッエザアルは、事が不意なので驚愕するのは當然と思ひ、靜に心を休めて居て吳れ、我は一應家に歸り、メッシナの王妃として迎へに再び來よう。家臣どもは殘つて、よく仕へて吳れと去る。家臣どもは少女の美を賞める。少女は、メッシナ家の不和合な家へ伴れられては、どうなることかと小さい胸を痛める。

メッシナの城内では、喜びの情で、居ても据わつても耐らない母后は、二王子を左右に侍らせて、いつまでも、隱すべきことで無いから、二人に告げるが、其方達には、妹があるのだ。この嬉しいさ中へその妹も呼び寄せたいと漏すと、生れて直ぐ死んだと聞いて居るのに、どうしたことかとマヌエルが問ふ、母后は、前に述べた、父王の夢、自分の夢を語り、神樣の命令通り、二人の仲を和げる平和の使とし

て、今日伴れて來るまで隱して置いた。淋しい所でどんなに大きくなつて居るか使が早く伴れて來るのが待遠いと明すと、弟王子は、何故早く知らせて下さらなかつたと云ふ。それはお前達が、爭ふから爭の及物の中に可愛い娘が、どうして伴れて來られませうと云ふ。兄は、母上、まだその上に、お喜び下さつてよろしいのは、日沒前に、美しい花嫁を伴れて來ます、その少女は、父君の御存命中、獵に出て山中の寺院で見初めたものであると、物語ると母も喜びの言葉を述べる。すると、弟が母上、私にも喜びの言葉を下さらなくつてはなりませぬ。私も一人花嫁を程無く伴れて來ますと云ふ。兄は、戰爭好きで愛の神を罵つた弟にこんなことがあると知つて愛の神を讃へつゝお前も戀するやうになつたかと抱きつく。母は、昨日にかはる今日の嬉しさ。一日の中に三人輝く娘が出來るのかとそは〳〵する情を禁じ得ない。然し氣にかゝるのは嫁の素性であるので、マスエルに尋ねると安心してゐて下さいと云ふ、弟は、その少女の眼を見ただけで他は聞く必要がないと信じて居ると

答へる。

母がッエザアルに、輕擧に嫁を決したのではないかと云ふと、彼は、亡父の葬式の時、母上の用心で、兄弟は遠距離に置かれた、そして、ふつと、一人の少女を見た、その少女の美しい魔力を感じたといふ。兄は戀の炎は、見交す時電光の如く靈の上に燃えるものである。自分が自分の戀人との間も弟のに似て居るといふ。老僧が歸つて來て、母后が早く逢はせてくれとせけばせくほど云ひ澁る。母后が、ディエゴや、ベアトリイチエは何所に來て居ると呼ぶのを聽いて、ベアトリチエと兄が愕く。母后は胸が裂けるといふ。「ディエゴは、姫君は海賊が盗んで去つたと云ふ。イサベラは椅子に泣き臥す。ムウル人の大船が近い海にあつたのが去つたと、その船に捕へられてござるであらうとのディエゴの話に、母は忰、海邊の船といふ船を探して娘を奪ひかへしてくれといふ。氣早の弟は早速出てゆく。愛する女と妹との名が一つなので、心を痛めた兄は、ディエゴに、いつから見えなくなつたのだと問

ふと明方といふ、母に娘の名はベアトリイチエとお呼びでしたねと再び尋ねると、こんなに泣いて居るのが見えないかい、お前も早く探しに行つて呉れと不機嫌である。ディエゴは、誰にも目にかゝらない場所を選んでおきましたが、一つお詫びしなければならないことがある。王樣の葬式が山の中へも聞え、お姫樣が見たいと仰せあるので、ヴエエルで面をお隱しなるやうにと御注意申し上げて誰にも告げずに葬儀場へ御案内しましたが、天性の御美貌は被へども光を放ち、その時、海賊の目にとまつたものと思はれますと語る。マヌエルは、これまで、度々戀人と語つたが、一度も葬式を見に行つたことを語らなかつたから、恐らく、同名異人であらうと少し安心する。母后が、ディエゴを恨む。神樣のお思召で誰も告げないのにお姫樣は、父上の葬式に臨まれたのでございますなどと述べる。弟が歸つて來て、出て行く兄に一緒にと云ふと、來るなと云ひ棄てゝ去る。弟は、妹の隱れ場所への道順を知りに歸つたのだ、母が説明すると、必ず取り戻します、その前、母君の許へ、戀人を

つれて來ると出てゆく。

ベアトリチエを見護つて居る、ッエザアルの家臣の前へ、マヌエルの家臣が婚禮用の金銀珠玉美衣佳服を運んで來る。ッエザアルの家臣が通過させまいとする。家臣と家臣とは罵り騒ぎ合ふ。マヌエルが來て、劍を拔き靜まれといふ。そしてマヌエルの家臣が御命令によつて此所に來ると思はぬ此の人達が居て、遮るので爭つて居るといふ、ッエザアルの家臣はッエザアルの命令で、此處に居るのだといふ。マヌエルは最前和睦した故、ッエザアルの命令は、我の命令と同一と心得よと云ひ、こゝを去れといふ。いぶかしみ乍らッエザアルの臣下は歸つて行く。ベアトリイチエが、待ちに待つて居たこととて、腕にすがつて、一刻も早く伴れて逃げて下さいと迫る。彼は彼女に問はねばならぬことがあると云ふ。彼女は、兵士を恐れて早く去りたいといふ恐れるに及ばない俺の家臣だといふと少女は、それなら、あなたはマヌエルさんなのと尋ねる。さうだといふッエザアルさんの兄弟かと再び尋ねる、

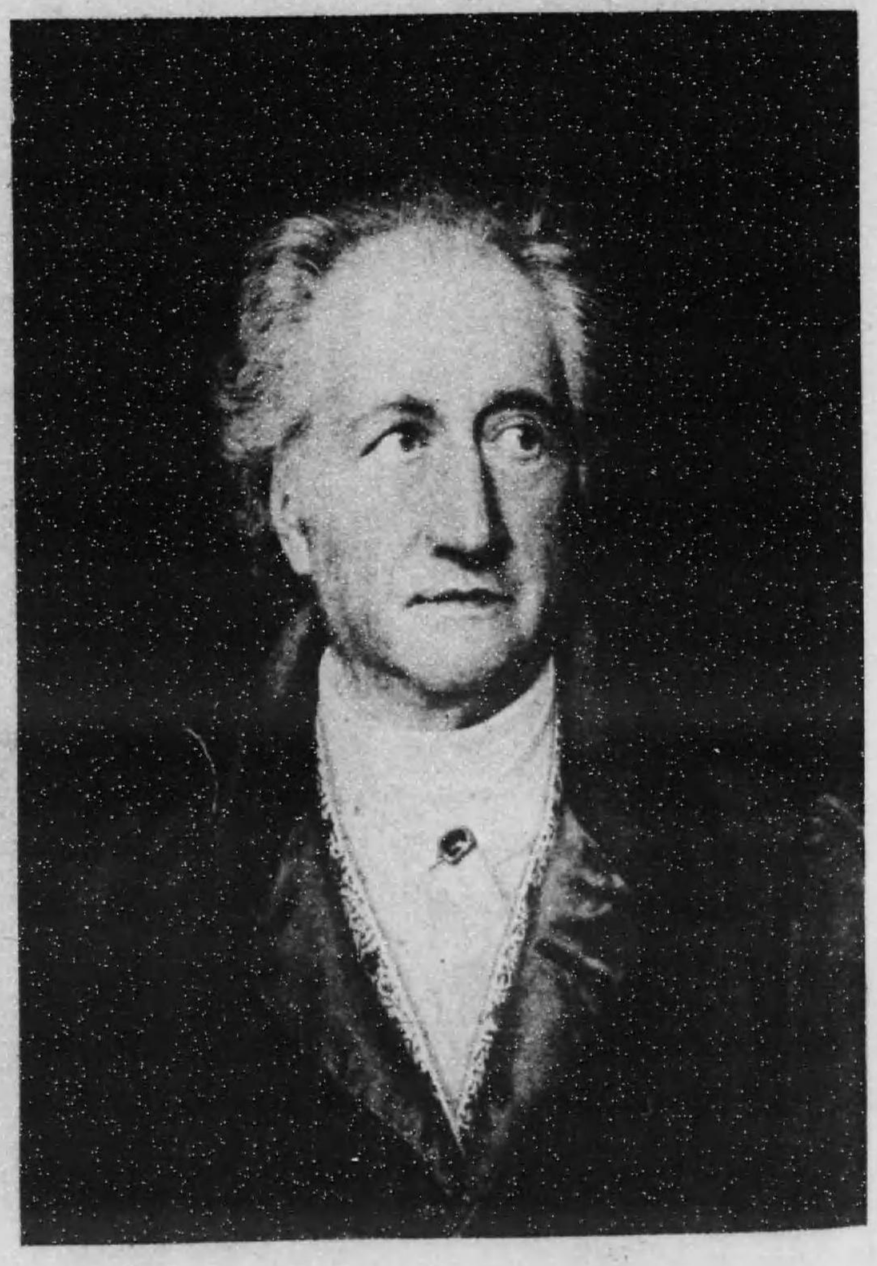
さうだと聽いてベアトリイチエの顏は眞靑になる。御不和であつたと承つて居ましたといふので和睦したと云ひ、お前の母の名を知らないかと云ふと少女は名は知らないが、女神のやうな顏で、雪の如く白い頸に黑髮が垂れて、眼は大きく曇りなく輝き、うつくしい愛にみちた聲を出されると云ふ妹らしいので、それが我等の母君だ、伴れてゆかうと云ふと少女は信じない。さうして居る所へ、家臣に向つて弟が、ひどい奴は何所に居る、行かう者共と怒氣を含んで高く叫んだのが聞える。それを耳にして少女が恐れわなゝき逃げようと手を取る。あれは弟だ、既に和睦したのであるから爭はないと云ふ。少女は不安で耐らない。マヌエルは、亡き父上の葬式に行つたかと尋ねると、行つたといふ。マヌエルは絕望した。弟と臣下と現はれる。臣下は吾々の言が信じられなければ、實際のあの有樣を見たまへと、嫉妬心を煽る。赫となつた若者は、マヌエルを斬り倒す。戀人の名と弟の名を叫んで、兄王子は死んでしまふ。マヌエルの臣下が戰を挑むが、首領が殺されたので勢が無い。ッエザ

アルは、この女を母の許へ贈れ、俺は妹を探しにゆくのだと云ふ。マヌエルの家臣は、母后の處へ、木を切つて作つた擔架に兄王子の屍乘せて運ぶ。

母后は、二王子の出て去つたあと、娘の身の上を案じて居ると、デイエゴが慰める。エトナ山頂の豫言者に使を派して娘の安否を尋ねさせた母后の許へ、使が歸つて、『失つたものは發見せられた』と隱者が云つたと告げる。母后は急に喜んで、誰が見つけたのかと云ふと兄王子でございますさうで、併し、隱者が、持參した松火を神前に運んだ時、その神の火が松火に移り、隱者の家は全燒したと話すので、母后の心は安まらない。そこへ、卒倒して居るベアトリイチエを運んで來て、ツエザアル樣の命令でお運び致したといふ切りで何も云はない。ベアトリイチエが覺醒めて、介抱してゐる母后を、お母樣と呼ぶ、娘よと抱く。少女はまだ自分の母が母后とは知らないので、あの人の母である御后の下につれられたら死んでしまふのにといふ。そして母皇の名を聞くだにゾッとするといふ中のわるい二人の王子があつて

などと云ふ。母后が、その二王子の母が自分で、二王子は、そなたの兄だと敎へる。其處へ、擔架に乘せられたマヌエルの死骸を運び込む。ベアトリイチエがそれに泣きかゝる后が、被を取去ると、血に染んだマヌエルなので驚いて、海賊のしたことゝ海賊を呪ふ。ツエザアルが歸る。ベアトリイチエが、それを見て恐れ憎む。母は、お前の睦しい兄は海賊の刄に若い身をこの有樣だ、早く仇を討つてくれと云ふ。弟は自分が殺したとは云ひかねる。マヌエルの家臣が、早く正直に云つちまへと憤る。母后は、よく救つて屆けて呉れたと、娘を得たことで悲しみをまぎらかさうとツエザアルに云ふと、怪しい母の言葉だと思ひ、私が救つたと云はれるのは誰ですと問ふ、このお前の妹をさと云ふ、妹がこれであると知つた一瞬、ツエザアルの驚愕は大きい。母はその驚きの樣子を怪しむ。ツエザアルは兄を殺したのは自分である。私の選んだ戀人を兄が抱いて居たので、憤りの餘り、兄を切り棄てました。豫言が當つたのだ、メッシナの家は呪はれて居るのだと嘆く。母后が奥に去つた後、出て

ゆかむとするペアトリイチエを遮つてツエザアルが、こんなことになるのもお前を愛したからだ、妹、やさしくして呉れと云ふが、死骸をこそ見守れ、何とも答へない。ツエザルは罪に惱む俺を棄てるか。母上とても兄の爲にばかり嘆いて御座る永久におわかれだと出てゆく。そして死なうとしてゐるのを、母が出てとめて、一日の中に二人の子を殺す母の悲しみを察して自害は思ひとゞまつて呉れといふ。殺したものが殺されたものと一つ穴に入つてこそ公平で、呪ひも消えませう、どうして下手人が生きてゐられませうと承知しない。母はペアトリイチエを呼んで、お前の愛でとめてくれといふ。娘は、兄上の靈を慰めたいから母上、死を許して下さい。妾からこの不幸は起つたので、妾には呪が掛つて居りますといぢらしいことをいふ。そして、ツエザアルに向ひ、お母様の爲めに生きてゐて下さいといふと、お母様の爲めにかと再び意味ありげに問ひかけると、そしてあなたの妹のためにといふ。それによつて、一時、思ひ止まるやうに見えたが、讃美歌が響き禮拜堂に兄の柩が燈



テエグ

に圍まれて居るのが見えると、兄の強い愛が何よりも強く身に響く、生きて居られないと自ら胸を刺す。

ゲエテとシルレルとの詩

ゲエテは、萬有神論（パンテイズム）の信者である。自然と自我とは一體と觀た。それ故、ゲエテは、人の善惡も、根本的に善なるもの、惡なるものと區別すべきでなく、神から誰も神性を受けて居る惡といふものは繪畫に於ける必然的陰影である。惡なるものは善の發展に於ける一の制止的機能に外ならないとしてゐる。それ故、人間は本來、罪惡に陷つて居る、と云ふ敎義には不同意であつた。この點で彼は敎會の基督敎に反旗を飜しカントの根本惡說を嘲笑した。それよりは、ゲエテは、意識的に生命の法則から遠ざかるものを罪惡としたのであつた。そしてスピノサの思想を喜び自己制限自己獻身に努めた。健全、素朴、自然は彼を喜ばせ、反自然、異狀、扭歪は彼を喜ばせなかつた。彼は生活肯定の樂天詩人であつた。

それ故、彼は、男女の戀愛を當然とした。彼は幾多の婦人と抱擁し、素朴、正直

に、その經驗を歌つた。又、彼は、あらゆる事物に對して無類の直感を以てその內面に浸透した。そして『客觀と主觀とは合一しなければ生氣ある藝術品を成し得ず』との見地に立ち、寫實的でなく、理想と融合した感興の湧出に從つて詩を作つた。それ故、彼の詩は、苦心慘憺、內に空しくして、これを產まむとするので無く、天來の感興に乘じて、湧くが如く流るゝが如くに迸出したのである。されば、自づと音樂的であり、用語が至つて平明である。彼自ら、『詩、我を作る、我、詩を作らず』とか、『我は詩の爲めに玩ばれる』とか、『我は鳥の歌ふ如くに歌ふ』とか云つたのは、眞である。彼が赤裸々に、自己の經驗を歌ひ、過去の詩人なるもの〻僞善的態度に出でないのを見て、攻擊したもの〻如きは、自ら、先づ覺醒すべきであつた。

ゲエテは、そんな輩には頓着せず、『自分をも他人をも欺くことの無い人は、天才の最も美しい特徵を持つ』と信じて動搖しなかつた。

『歡會と離別』は、フリイデリイケを訪ねた時の詩である。

胸波うてば馬に乗り
にはかにわれは出で立ちぬ
夕暮早も地を睡らせ
峰には垂れぬ夜の帳
さ霧の衣身に纏ひ
巨人のさまに樫立てり
百の黒眼を持つ暗は
そなたの森より脱むなり。

雲の峰よりかなしげに
さ霧をわけて月は照る

輕き翼を動かせて
風すさまじく耳に鳴る
夜は無數の怪物を
產めども樂しわが心、
脈に何たる焰ぞや
胸に何たる火なるぞや

君にし逢へば美しき
君の眼はよろこびを
わが身の上に注ぐかな
われの心は身を飛びて
きみに寄り添ひ波うてり

春うつくしき薔薇の色
うつくしき顔染むるなり
あゝ、あゝ、やさしきそのそぶり
望みて得ざりしものにかも

さはれ、夜明けとなれる時、
離別は胸を亂したり
うれしかりける君の接吻(キス)
かなしさ溢れし君が眼(め)よ
わかるゝ時にうなだれて
涙の眼もてわれ見しよ
さはれ何たる幸ぞ

愛せらるゝ身、愛する身。

如何に、彫琢の跡を見ないで快いかを知るに足らう。彼の詩中、有名なる『五月の歌』は、次の如きものである。北獨逸の五月は、日本の春の季候である。

あな、ほがらかに麗はしく
晴れわたりたる自然かな
日は輝きて
野ぞ笑ふ
枝々に花ほころびて
森毎に鳥
うたふかな

快樂、歡び、胸毎に
泉の如く湧き上る
おゝ日おゝ地
幸、快樂

おゝ戀よ戀おゝ戀よ
見渡す峰に横臥せる
あしたの雲の如くにも
金色なして美しき

ほゝゑむ野邊よ、春霞
なれが惠みの

みつるかな

あゝわが少女少女子よ
君を愛する程、如何に
あなやさしかる君の眼よ
君もわれをば愛すなり

雲雀は愛づも
歌や空
朝花はまた
天の香を

われは汝をし
わが胸の熱き血をもて
愛づるなり
あゝ青春と喜びと
また力とを汝こそは

あゝなれこそはそれらをば
わが新しき歌の上に
舞踏の上に與ふなれ
あゝとことはに幸あれよ
いましわれをば愛でよかし

彼は『旅人の夜の歌』と題して、次の如く歌つて居る。

汝は空より降り來て
なべての苦しみ痛みを鎭む
あはれ哀しみ深ければ
汝が慰めも深きかな

嗚呼奔命に倦んじつれ
苦痛も快樂も今、何ぞ
甘き平和疾く來れ
疾く疾く來れ此の胸に

此れは、一千七百七十六年二月十二日の作で、人妻、シュタインを戀ひ、シュタ

インが彼に應じない頃の作で、これもシュタイン夫人に贈られたものである。その頃、彼の手紙に『大小色々の人からの愛憎諂阿反抗を向けられて頭腦と心胸とを以てこれに當つて居るが併し愉快だ』と書いて居る。仕事の疲勞は、彼を傷めるに足りなかつたが、戀のなやみがこの詩を作らせたのだ。戀に惱む身は宛ら、疲れ果てた旅人であると訴へたのだ。

彼の抒情詩は彼の戀愛事件と關係のある場合が多い。彼の詩を味ふのには彼の戀愛事件を知つて後にすると興味が甚しく深くなる。

併し彼は、抒情詩人に終始したものでない、彼の『ファウスト』を見よ。そこに哲學詩人としての彼が、呼吸して居る。

彼は詩は、哲學を要す、敎訓的たるべし、然れども、そは目立たぬやうに注入せざるべからずとの意を漏らして居る。これは詩を作る人の注意すべき點だ。『神性』Das Gottliche と題した詩の如き、彼の世界觀を示したものである。

われらの豫感する
知り難き高き實體こそ
げにもめでたき。
人はも似たり實體に
人のの例こそ
われ〳〵に敎ふなり
その實體を信ずべく

と云ひ、

人、たゞ人のみ
不可能のことも遂ぐ、
差別し撰びはた判き
瞬間に永久をも

與ふなりけり

と云ひ、又、

慈悲深く善良なる
高尚の人となれかし。
正しくして有用に
倦まず撓まず
われ〳〵の心の内に
豫示せられたるそれらの
實體の表象となれ

と云つて居る如きに窺ふ可しだ。

彼の、物語詩 Balladen 歌謠 Lieder に見るべきが多い。これらは皆民謠 Volkslieder と呼ぶべきもので、彼がヘルデルに面會した際彼から民謠を興隆すべしといふ意見

を聽きそれに動かされ、彼の古來の民謠を集めて『民衆の聲』Stimmen der Volker と名けて出版した事業をも幾分手傳つた。以來、更に、第十二世紀以來の獨逸民謠を調査し、自ら、民謠を作つた。ゲエテこそ、獨逸民謠中興の祖で、ハイネ Heine ウウランド Uhland アイヒエンドルフ Eichendorff などは、ゲエテの起つた運動の後を追つたものである。

昔、ツウレに王ましき
なさけ深かる夫にとて
王妃は臨終に殘しけり
手づから黃金の杯を

こよなき寶あらずとて

うたげの度に取り出して
飲む毎王はおもひでに
あつき涙を流しけり

死なむ日近しと思ひてし
王は國内の都をば
すべて世嗣にゆづりしが
杯のみは殘しけり

海に臨める城の中
王座につきて
數々の騎士

侍らせて宴しぬ

その時王は飲みにけり
これを限りの生の火と
飲み乾してより杯を
王は投げけり海の上に

落ちて傾き底深く
沈めるさまをかなしげに
見てし時より雫だに
王はも飲まずなりにけり

これは、ファウストの中に入れられて、マルガレエテが唱ふことになつて居る。『漁夫』Der Fischer や『魔王』Erlkönig などは、就中、人口に膾炙したものである。歌謠では、『野薔薇』と『牧人の嘆き』Schafers Klagelied が優れて居ると云はれる。前者は、一般に、フリイデリイケを手折つたゲエテの經驗の自白とせられて居るが、この意味の民謠は、獨逸にその當時流行したもので、ヘルデルにも、これを材にした、Roslein auf der Haide がある。ゲエテの Heidenröglein は

童見出でぬ薔薇をば
あれ野の中に薔薇をば
朝と若く美しき
近づき見まく駈けよりて
飽かぬ眺めを喜びぬ

薔薇　薔薇　紅の
薔薇のつぼみ野の中の——
童は云ひぬ『われ折らむ
いまし薔薇の蕾よ』と
薔薇いらへぬ『われ刺さむ
忘れたまはぬほどにもよ
折らるゝことに耐へねば』と
薔薇　薔薇　くれなゐの
薔薇のつぼみ野の中の——
わらき童はそを摘めり

あれ野の中の薔薇をば
薔薇は拒み刺しけれど
はた泣きけれどかひぞなき
あはれ薔薇は折られけり
薔薇　薔薇　紅の
薔薇のつぼみ野の中の——

である。

ゲエテの詩より、シルレルの詩に目を轉ずれば、中春より初冬に入つた感がある。ゲエテの詩は柔くシルレルは堅い。前者は即興詩人であり後者は冥想詩人である。前者は輕妙に富み後者は崇高に富む。前者は人を笑はしめ後者は人をして默然たらしむ。

シルレルの詩中最も傑作と稱せられるは『鐘の歌』で、これには、佛蘭西ルイ王の殺されたる以來反動又反動を生み、怪物出でゝ怪物を殺し、屍山血河の慘劇が痛快とせられ、眞理も道德も全く破棄せられたるに觀て、往年、革命熱に捉はれたる彼が此れを呪咀するに至つた跡を歷然と見得る。

ベルリン劇場の前にベエガス Begas の作つたシルレルの有名な立像が在る。その臺石の水盤の所に四個の表示的女性を置いて居る。前面の左は彼の『抒情詩』を、その右は『戲曲』を、後側の右は『哲學』を、左は『歷史』を表示せむとしたものである。シルレルは、詩人であり戲曲家であり哲學者であり、歷史家であつた。されば詩人としての彼を見る場合に、全然、他の影響又は關係を無視することは不可能である。彼の詩には、彼の哲學彼の歷史研究の影響が著しい。その史詩が歷史研究の所產であることは云ふを俟たず、『理想』Die Ideale『理想と人生』Das Ideal und Leben『藝術家』Die Kunstler『人生の詩』Poesie des Lebens の如きは、哲學詩と云

ふべきものである。又、有名な『歡喜の歌』An die Freude も當時の彼の哲學觀念を窺はしむるに足る。

彼は理想家であつた。理想あつて人生の缺陷が補はれる、理想の國に入らざるべからずと高調し、藝術は理想の表現たるべしとし藝術によりて、此の悲しみ多き人生も笑ふに至ると斷じ、藝術敎化を叫んだ。

シルレルの物語詩は、獨逸本國に於て頗る好評を得たのであつた。『エロイジス祭典』Das Eleusische Fest『シエレスの嘆き』Klage der Ceres『カツサンドラ』Kassandra『イビユクスの鶴』Die Kranicho des Ibykus『ヘロオ、レアンデル』Hero und Leander『水潜り』『手套』『保證人』などがある。

此の『ヘロオとレアンデル』は興味深い材料を、其の非凡の筆を以てまことに巧妙に描いて居る。その大要はダルダネルス海峽、ヘレスポンドの海を隔てゝ兩岸に在る城の歐羅巴側に美しい少女ヘロオが住み、亞細亞側に、青年レアンデルが住んで居て互に戀着した。それを兩方の父親の不和が、割いてしまつた。ヘエベ女神に肖る少女は高樓の欄に凭つて、對岸を眺めて、戀情に耐へない。思ひは同じレアンデルは、

日の影しだいに薄れゆき
み空ゆ夜の幕落ち來り
海の面全く暗き時
海に入りたり戀の猛者
およぎに馴れし腕ふるひ
逆卷く波を押しひらき
かなたの岸の高樓に
招く燈火を目指しゆく

かやうにして、美しい娘の腕に抱かれ、あまい接吻に醉うて、時の早く過ぎて曙に

なることを慨き、忍ぶ戀路の悲しくも未明となれば又海に入りて泳ぎ歸つた。かやうに三十度もたのしい逢瀬を重ね、水冷たき冬の近づくのを却つて、夜が長くなると二人はうれしがつたこともあつた。美人は、海を瞰して

しろかねなせるわだつみや
波に戯る海豚の族
うるはしき魚列りて
水の面にのぼり來る
そのさまも透き見ゆるなり
いろくづれは知るといふ
忍びの戀をさはあれど
ヘエカラ神の定めにて
彼等の口は默すかな

と喜んだ。そして或夕暮、また招きの燈火を樓上に置くと、それを望んで青手は海に飛び込んだ。所が急に、天候一變、强風荒れ狂ひ降雨は大地をも貫くかと疑はれ、雷光は物凄く射り、海は大きなる地獄の口を開いた。少女は、氣も狂はむばかりである。

さかまく波を押しひらき
來給ふ君の姿はよ
氣遣はしやと見るひまに
あはれ高潮君うばひ
海の底にと沈めたり

烈風の爲めに、情夫の目標にした燈火は消え、海面も空もたゞ暗く恐ろしい。翌朝、磯にうち上げられた青年の死骸をみて、少女は悲しみに得耐へず、風に衣の裾を吹かせて海に飛び込んでしまふといふ頗る劇的興味の深いものである。

「水潜り」は、海中に恐ろしい渦巻のある所で王が、從者を顧みて、騎士たるを問はず、扈從たるを問はず、今、海に投げ入れむ黄金の杯を取り來れと命じて、杯を投げ込んだ。恐ろしい海へ入らうとするものが無い、王が怒りの聲あらく、一人も無いかと云ふ時に一人の扈從が裸體になつて逆卷く怒濤の中に躍り込む。そしてあはれや、再び水面に現れることはなからうと人々が愁ひに眼を曇らせて居る時、左手に黄金の杯をさし上げて水面に表れ、王に捧げた。王は姫を呼んで、それに波々と葡萄酒を注がせて飲んだ。扈從は杯が幸に珊瑚の枝に掛つて居た故。もち歸るを得たが然らざれば、到底その下へは恐ろしくつて進み得ないと云ふ。

刺あら〳〵しき鋪魚巖魚
恐ろしくまた醜くかる槌魚の群
さては鱶(ふか)くろ〳〵とそこに密集し
海狼は齒を見せつ

と語ると、王は、今一度、そこに入り來つて、海底のさまを語り聽せよ、然る時は指環も與へよう、杯も與へようといふ。それを聽いて姫が、父にその無謀と無慈悲を攻めて諫言する。然し王はそれを用ひず、杯を、海に投げ、もしそれを取り來つたら、騎士として此の姫を妻に與へようと云ふ。そこで若者がまた海に投じた。

やさしきめもて恐ろしき
淵眺むるは誰ならむ
逆卷き寄する大波や
湧きて渦まく淵の波
水とことはに廻れども
そこに入りにし青者の
姿はつひに歸らざり。

といふのが Der Taucher の大意である。

『手套』は、フランツ王が猛獣の闘技を見ようと、一頭の獅子と一頭の虎と二頭の豹とを然るべき場所へ引出した。王の周囲には高官貴女が、美しく着飾つて集つてゐた。中に少女クニグントが騎士デロルジエに、猛獣の居る所へ手套を投げて、

あざけり顔にかく云ひぬ
われを思ふの言の葉の
さばかりもしも深からば
とりて來ませよ手套を

騎士はその言葉を聞くや
あしなみ亂さずその騎士は
急ぎ下にと降り行き
手套を拾つて來て、それを、美人の前に捧ぐるかと思つたら、少女の顔に投げつけて、雄々しく少女をふり捨てたのである。

手套 Der Handschuh の次に保證人 Die Bürgschaft の意味を掲げよう。

七首かくしてダアモンは
暴主に近く寄りつれど
あはれ護衛に捕はれつ
『その七首の用如何に』
刺客答へぬ憤然と
『暴主の手より此の市をば
救はむ爲の七首』と
『さば十字架の上にして
悔い嘆くべき時あらむ』
『もとより死をば恐れねば
生命請ふべきわれならず

さはれ王もし情あらば
妹。嫁がせ歸らんまで
われに三日を與へかし
保證に殘すは友なる一人
われもし逃げなば彼をし殺せ』

意味ありげなる笑まひもて
しばらく考へ王いひぬ
『我はたやすく許しなむ
されど忘るな約束の
時し來るも歸らずば
かはれる友は十字架に

さらば汝は助からむ』

ダアモン友の家に來て
『王殺すべくなし〻故
命とらる〻われなれど
三日の猶豫を王に乞ひ
妹を人に嫁がせむ
願はくば友歸り來て
君が繩をば解かむまで
われに代りてたまはれ』と

友は彼をばかき抱き

そをうべなひてためらはず
その身ゆだねぬ暴主にぞ
ダアモン市街を出で立ちて
三日目の朝妹を
嫁がせ期日に後れなば
友危しと氣づかひて
ひたすら歸りを急ぎけり

その頃大雨降り止まず
山より瀧と水くだり
大河小川水まさり
濁流橋を突き流し

流れは鳴りてもの凄く
み空ものすごと猛るなり

せんすべをなみ土手の上に
かなたをみやり聲あげて
呼べども彼を渡すべき
船は來らず船人の
影だに見えず水はなほ
海の如くに汎濫す

彼は堤にうち臥して
ツユウスの神に合掌し

『あはれ御神奔流を
止めさせたまへ然らずば
時の歩みは小休みなく
日は早南とおぼゆるに
夕暮そこに歸らずば
友の生命はなからむ』と
涙流して祈りけり

泣けど祈れどかひもなく
水勢いよ〳〵加はりて
波波の上に捲き躍り
時は早くも過ぎゆくに

かくてあるべき身ならずと
山なす波浪に飛び入りて
力の限り泳ぐをば
憐れと神もみたるらし

岸に上りて神に謝し
足を早めてゆく折に
森のかげより盜賊の
一群出でゝ道塞ぎ
棒ふりかざしてさへぎりぬ
旅人青き顔あげつ
『汝等何をば望むとや

見よわがもてるは命のみ
それさへ國主のものなり』と
云ひつゝ一人の棒うばひ
友の爲めなり許せよと
忽ち二人を打倒せば
殘るは恐れて逃げてけり

太陽赫々輝けば
疲れし脚のなえたわむ
覺えず身をば押しかゝめ
『神よわが身を盜賊や
河の水より救ひしが

今また渴して耐へがたし
こゝにて果てなばわが友の
死なむを如何』と祈りける。

あゝ銀(しろがね)の響立て
泉流ると知りしより
耳そばだてゝ近よれば
岩の峽間ゆさら〳〵と
清き泉は流れたり
喜び掬ひて渴きをいやし
眼(まなこ)を木の間洩る日に照れる
みどりの牧場に轉ずれば

黒く大なる影をば畫き
市を出でたる旅人ふたり
急ぎゆきつゝ語るなり
『あはれ罪人かゝらむぞ
十字架上に今こそ』と

心懸りの翼、鼓し
憂慮の苦痛に追はれつゝ、
いよ〳〵足を早むれば
シユラキイス城に落日さす
忠實の家扶迎へ云ふ
『疾くこゝよりぞ去りたまへ

友を救ふに手段無し
今こそ友は死につらん
暴主の嘲りうちわらひ
歸りたまふとうち信じ
望み抱きて刻々に
君の歸りを待たれしが——』

否々われの遲過ぎて
友の命を取られなば
友のあとをば追ひ行かむ
この良友に義を破り
暴主に勝利な云はしめそ

彼もし二人の犧牲に逢はゞ
愛と信とを或(ある)は見む

日の影全く沈める頃
彼城門に近づけば
群衆環視のその中に
今十字架は立てられて
友は刑吏に引かれ來ぬ
彼群衆を掻きわけて
叫びぬ『保證を殘しゝ身
今こそこゝに歸りつれ』

群衆おどろき目を張る中
二人は相抱き喜びと
はた悲しさに泣きあへば、
見るものいづれも泣きにけり
暴主はかくと使者に聽き
動かされけむ二人をば
おのれが前に召しよせぬ

王は云ひけり『われをしも
信實(まこと)が痛く動かしぬ
われは知りけり君達に
妄想とのみしりぞけし

信實の力を、願はくば
われをも友となせよかし
許さば直ちに今よりぞ
三人が伴侶の一たらむ』

シルレルの『ヰルヘルム・テル』

ゲエテが、一千七百九十七年に、シュワイツに遊んだ頃、チュウディ Tschudi の瑞西年紀 Chronicon Helveticum を讀んで『ヰルヘルム・テル』Milhelm Tell に就いて叙事詩を作らうと思うと友に談つた。それは、定めし立派なものにならうとシルレルは期待して居た。後、シルレルが、チュウディのもの及びミュルレル Muller の瑞西同盟史 Geschichte Schweijerischer Eidgenossen を讀んで、テルについて大變、感興を催した。乃で、ゲエテに相談すると、君が劇詩をつくるならば、自分が手に集めて居る材料も供給し、且つ君は未だ瑞西に遊んだことが無いから、自分の見聞をも併せて提供しようと云つてくれたので、シルレルは、ゲエテの親切を喜んだ。そして、『オルレアンの少女』『メッシナの花嫁』を終つた後、千八百三年八月、この戯曲に着手した。そして翌年二月十八日脱稿した。

この戯曲は、彼が完成したものゝ最後の大戯曲であつて、これを青年時代の群盗に比する時は、誰も、群盗の主人公が、現社會を咀ひ反抗し革命を欲したるに異り本戯曲の主人公は、決して、私憤の爲めに現在の社會組織を破壞せむとはせず、公憤の爲めに、舊社會を維持せむとしたことを觀るであらう。カアル・モオルは、まだ自覺の域に到してゐず、ドンカルロスのポザの國家主義愛國主義にしてもテルの如くに確固として居ない、彼等の Watch-Word は、Liberty 自由で無く、Freedom 放縱であつた。テルの思想は潔く意志は強く、義俠の精神は終始不動で、物に感じて動搖して根底を忘れるとか處置をあやまるとかいふやうな所がない。著者の成熟した思想はこの戯曲中に現れて居る。脱稿後、約三十日を經て、ワイマル劇場に大好評を博して以來、今日なほ、諸劇場に上場せられて居る。

墺太利の公爵ハプスブルグ家のアルベルト（後、獨逸皇帝となつた）が瑞西の三部落シユヰツ、ウウリ、ウンテルワルデンの自由權を剝奪し、ハプスブルク家の私

有の領地としようとし、ゲツスレルと呼ぶものを奉行として、威壓し服征せしめようとした。こゝに於て、この三部落から志士が蹶起して自由の爲めに戰つた。キルヘルム・テルはその一人である。

ゲツスレルは、アルトルフといへる所に、アルベルト公爵の帽子を竿頭に掲げて、人民にしてそこを過ぐるものに跪拜することを強いた。テル一日、そこを一子を伴つて過ぎ、之れに禮を行はなかつた。平素より、テルが、衆民の代表的人物となつて、反抗するを憎んでゐたことゝて、ゲツスレルは、テルの子の頭上に林檎を載せて之れを射さしめた。もしあやまたば、最愛の子は、忽ちに、また父と呼び得ないのである。幸にして、矢は林檎を射落したが、はじめ二つの矢を用意したるをゲツスレルが何故かと問ふに及び、もし子を射殺したらば、殘る一矢を貴公に向けむが爲めであつたと答へた。ゲツスレルはこれを憤り、テルを捕縛して、キユツスナハト獄に投ぜんと舟に乘せて、湖を渡らうとした。激浪舟を木の葉の如くに上下して

舟中の者皆危からむとするに及び、舟子は、テルの縛を解かば、彼の、舟を操るこ
との熟練は或はこの窮地より吾等を救ふを得むと云つた、乃ち縛を解かれたので彼
は舟を操つて、陸に續ける巖角に寄せ、自己のみ上陸してゲッスレルを舟に殘した。
テルは、キュッスナハトに至り、山道に、ゲッスレルを要してこれを射殺した。
この報の傳はるや、瑞西人民は大いに歡呼してこの際一舉して敵を一掃せむと敵
の城砦に放火しなほ、墺太利皇帝の軍勢に備へむと協議してゐる折から、皇帝は、
遺産分配の爭によつて甥シュワアベンのヨハンに殺されたとの報知があつたので、
人民は、萬歳を叫びつゝテルの家に集つて彼に謝したといふのがその大要である。
其の幕と場とについて云へば、序幕第一場は瑞西の風光明媚なるルッエルン湖の
ウウリ郷の一部で、岸近に小屋があり、水を隔てゝ日に輝く緑の牧場村落の家々、
左にハアケンの高峰右に雪に白い山々が見える。舟中に漁夫の子が唄ひ、斷崖の上
に牧人が歌ひ、對岸で獵夫が唄ふ。急に、雪なだれの音がし、天氣も一變する。漁

夫ルオオデイ、獵夫ウエルニ、牧人クオオニ、などが相近づいて、大暴風雨が襲つ
て來る、早く船を入れよ、牛に氣をつけろ、犬が土を堀り、魚が飛んだり、水鳥が、
あんなにもぐるやうぢや、恐ろしい暴風雨が來るのだらうなどと話して居る處へ、
バウムガルテンといふ男が、息急き駈けつけて來て、早く船を出して呉れといふ、
どうしたのかといふと、追手が來る代官のウオルフエンシイスが女房に風呂をたか
せた上に、淫なことを迫つたと木を切つて居る所へ告げに來たので、斧で打殺して
やつたんだ、所が早くも追手が來る、早う生命を助けてくれとたのむ。この時また
も激しく雷鳴するので牧人が漁夫に渡してやつてくれと言葉を添へても、船を出し
たら、こつちの生命が危い、此の人にも妻子があらうが、俺にも可愛い妻子が待つ
てると承知しない。南方から、風が激烈に、吹き來り湖が荒れ狂ふ、雷鳴いよ〳〵
加はる。バウムガルテンが、失望して、捕手に摑まつたら、直ぐ殺されると身悶え
する。そこへ、ウウリ部落の、キルヘルム・テルが、弓矢を手に持つて出て來て、事

の概略を牧人の口から聽き、漁夫に此の男を助けて遣れといふ、正氣のものは、そんなことはしないと拒む。こんな折にこそ他人の爲めに活いて、自分の身の上は神樣に任せろとテルが云ふ。漁夫が、そんならお前さん、自分でやつて上げなさいとしりごむ。テルはなほ、二言三言漁夫に言ひかけてみたが動きさうもないので、それぢや俺がやつてみると立ち上る。牧人が見上げたものだと云ふ、生命の親だと、バウムガルテンが拜む。テルは代官の手からは救つても、神樣の手で殺されるかも知れないよ、俺の身の上もわからないと牧人に妻子をいたはつてやつてくれとたのんで船を乘り出す、船が大浪に見えたりかくれたりする。追手が馬で馳けつけて、舟で逃げたと知つて、逃がしたは、そちたちだ、思ひ知らせてやれと、家を崩し、火をかけ、牛や羊にも滅多打を浴せる。

第二場、シユキッ鄕の有力家スタウフアッヘルを、ルッエルン鄕のブフアイフエルが訪ねて來て、墺太利へお互に附かないやうに、獨逸に附いて居さへすりや、神

樣の加護がある、奉行が、非道なことをしようとも、我慢して、墺太利へ下らないやうにしませうぞと握手をして去る、あとを見送つて、樹蔭のベンチに腰を下して深い思ひに沈む。その有樣を見てゐた妻は、どうしてそんな、沈鬱なお顏をなさつて考へ込んでゐられるのか、胸に何か隱してゐられるに違ひない。穀物は十分に豐り、家は富んでゆくばかり、牛馬も肥え、新宅も立派に出來上つたのに、何といふ窟托顏なのと怪しむ。彼は、家は立派に出來ても肝腎の土臺がぐら〳〵だといふので、それは何のことなのと妻が尋ねる。すると、先日、こゝにかうして出來る家を見てゐると、キユスナハトの館から奉行の奴が家來をつれて通りかゝり、知つて居る癖に、この家は誰のかとたづねた、代官だと思ふから、平身低頭して然し氣を利かせて、王樣のものぢやと云ふと、プリ〳〵憤つて、百姓がこゝへ勝手に家を建てるからには、そのまゝには、しておけない近日處分すると吐した、それが氣にかゝると主人が話す。妻は妾が鄕家に居た頃、父も相當に信用のあつた人故、重要な人

達が集つて會合した時、その話をきいて居ります。瑞西の人民が墺太利へ附かないので、あの代官は、あなたが、ある爲めだと睨んでゐるのですよ、邪魔物を除かうとしてゐるのに相違ありませぬ。それ故の御心配だ達ひますまい。あなたは、あつちから、手を下して殺すまで、じつと待つてゐられるつもりか、ウウリでも、皆、こゝ同樣、あの奉行グッスレルの非道に苦しみ怨んで居り、ルッエルン鄉でも、ラッデンベルヒといふ惡い奉行に酷い目にあつてゐるのですから、重立つた人達で、こちらから事を起して、追つ拂つたらどうでせうといふ。主人は、そんなことをいふが、この平和な境を血で汚し、いくら熱心でも、王軍にかゝつたら土民は一耐りもなく負けてしまはうかと氣にかゝるといへば、心の雄々しい妻は、貴公達も男なら斧の揮りやうは御存じでせうと云ふので、そんなことを云つてゝもこの新築などが燒かれたら嘆くだらうと冷かす。すると、そんなに、氣がゝりになる新築なら自分で燒いてもよい、妾なんかゞ哀れだと思はれなよ。正義自由の爲めの戰ひを起さ

れての結果なら、まさかの時には、敵の手をまたず、そこの橋から身を投げるとひるまない。主人はそれを聞いて、大安心、それぢや、ウウリ鄉へ出かけワルテル・フユルストに相談し又、アッテングハウゼンの男爵ウエルネル樣とも協議をしようと出かけようとする所へ、ウウリ鄉の、キルヘルム・テルが、助けた、バウムガルテンを伴れて來る。第三場、普請場で、屋根には屋根師、足場には職人がそら、石だ漆喰だ、と、鬼のやうな無慈悲極まる、普請監督に、少しも休ませられずに働いて居る。牛馬よりも酷くこき使ふので、一同憤慨してゐるが、如何ともせむ術もなく、疲れ切つた身體を動かせて居る。これは、ウウリの砦とでも云はうか、これが完成すれば、人民は一層、ひどい目に遇ふのである。家へ歸らむとするテルとウウリの友人の許へ行かむとするスタウファッヘルとが、同行して、このアルトルフの普請場に通りかゝる。そして酷使せられる人々や、造られた人民を入れる窖などを見て、嘆聲を禁じ得ない。石工がテルに、構造の堅固なことを云ふと、テルは人手で造つ

たものは人手で壞せる、あの砦の方が堅固だぞと山を指す。そこへ竿の先に帽子を載せて太鼓を鳴らして一團の人が來る。その一人が上意ちやと云ひ、この帽子をアルトルフ村に掲げて置く、人民共は、代官同樣にこの帽子を敬し、低頭三拜せよと呼ばはる。テルが歸らうとするのを止めて、スタウファッヘルが、自由の爲めに、蹶起したいと相談する。テルは、たのみになるのは、結局自分一人だといふので、一味に加はらない氣かといふと、私の氣性で、どうして出ずに居られませう、たゞ、思案や試みは、さらひだ、まさかの時には、呼んで下さいと契約してわかれる。餘り酷使せられるので、屋根屋が高い所から落ちて死ぬる。貴族の息女ベルタ姫が通りかゝつて助けたいといふが、息をふきかへさない。第四場、ウウリ鄕の名望家ワルテル・ヨンユルストは、代官から目をつけられてゐるメルヒタアルと云ふ若者を隱してゐる。この若者が、可愛がつて飼つてゐる大きな番の牛を、役人が代官の命令ぢやと奪つて去らうとするので、棒でその役人を毆つた爲め、捕手が始終、探偵して

ゐるのである。この若者は家に殘してある父親を代官が虐めては居ないかと氣がかりで殺されても歸つて見たいといふ。先づ〳〵何とか音信のあるまで隱れてゐよと奥へ追ふやうに立たした時、スタウファッヘルが訪ねて來る。これは珍らしいどうして、ぢざつたかといふと、昔の瑞西が戀しくつて來たと云ふ、お出での途中において目についた物でもぢざつたかと問はれて、ウウリの砦といふ牢屋が建つのを見た、どうも、かうなつてはかなはない、ウンテルワンデンでもロスベルヒに居た代官ウオルフエンシイセンが、アルッエレン村のバウムガルテンの女房の臀を追ひ廻し既に貞操を汚さうとしたので、斧で打殺したと談れば、それは面白いが、あの男は平生實直な男と聞いたが、うまく逃げましたかと主人が尋ねる。危い所を、貴殿の聟に當るテル殿が湖を渡して助けて、拙者の家へ伴れ込んでぢざつたにより隱してある、その男から聞けば、なほ酷いことがある。メルヒタアルにハインリヒといふ老人があるその息子の番の牛を代官のランデンベルヒが奪はせようとしたのでその牛

を取りに來た奴を撲つて逃げた。所が、親父を捕へて責めた上に、地へ撲り倒して眼玉へ、燒金をジュウと突込んだと話す。これを聞いてメルヒタアルが何、眼へ眼玉へと飛び出す、そして兩方の眼へかと問ふ、二つともやられたさうだと云へば、メルヒタアルが父の身を思うて涙にくれる、スタウファッヘルは、いやまだその上に、裸にして盲目になつた親御を乞食に出したと云へば、若者は、血相變へて、代官へ報復すると出て行かうとする。早まるなとワルテルが制すれば、同志の二十人も集めれば、どんな所に籠つてゐようと恐るゝに足りないと云ふ。スタウファッヘルがワルテルに、最早、時期が來たといふ。ワルテルは、アッテイングハウゼンの殿さまは、身分の高いのに係らず、人民の味方をなさる方だから、御意見を承つた上でにしようといふと、メルヒタアルが、こゝのお二人より有難い名は無い、先祖から德を布かれ、御二人の代になつても善行を積んでござるのだから、貴族の助なんか不要だと云ふ、二人は、われ〳〵が旗上げしたら殿樣も默つてみてはござるま

い、我々は部落の同志を集めるが、ウンテルワンデンの方へは誰を遣りませうと云ふと、若者に自分を遣つてくれと勇みたつ、そして同志はどこに集つたらよからうと協議しリユウトリと云ふ草原に夜中、三人が同志の重立つた十人を導いてそこで決議しようと三人は手をつないで、どんなことがあらうとも此の三鄕を代表した三人は命を懸けて目的を貫かうと誓ひ合ふ青年は、早く、代官邸を燒いてうれしいたよりを目の見えない父の耳に入れたいと勇み立つ。

第二幕、第一場、アッテイングハウゼン男爵は、八十五歲の高齡、邸內で農夫六人牧人クオオニと酒を飲んで居る。この平民的な男爵に似合はない、華麗な服裝をして甥のウルリヒ・フオン・ルデンッが、何の御用ですか、忙しいのに參りましたといふ。男爵は、老人になつたので、昔の戰場に出た勇氣が無くなりやがつてこの世を去るのぢやと甥に云ふ。牧人が、ルデンッに杯をさす、いやだといふ風を示す。農夫等が去つたあとで、武裝をしてどこへゆくアルトルフの代官所へかと尋ねると

さうですといふ故、こんな所に長居は出來ない叔父さんに用は無いといふ。そんなに墺太利の服裝をした所を見ると、其方は祖國に反き敵方につき、百姓の挨拶を耻かのやうに思ふまで、虛しい目前の利に惑ひ、國民の苦しみを知らぬ顏に、自分一個の利慾を計る內應者になつたかと憤り慨く。ルデンッは、國民は、勢の盛んな墺太利皇室に從へば忽ち安穩に生活出來るのに、獨逸のやうな賴みにならない國を賴んで、自分勝手に苦しんでゐるのが思の骨頂だ。叔父樣なんかが第一に何故第一に墺國に歡を通じないのですと云ふ。男爵は、先祖からの此の地に居て、俺の跡を相續すれば、お前は、こゝの領主だのに、あちらへ、お前がどんな忠義をしたとて、どれほど有難がられるか、想像して見るがよい。墺太利が何で惠深いものであらう、虐政はルッエルンあたりへでも出て見ろ、どんなものかゝ解る、どうせ、殺されるなら、こちらから反抗しようとしてゐるのだ、お前も流す血なら國のために流せといへば土百姓が王軍に向つたつて何になりませうと云ふと、さうぢや無い、老人は

經驗から物を云ふ。今日は急かないで久しぶりに來たのだから話してから歸れと手を握ると約束の人は既に約束の地へ到着した時刻だから、歸して下さいと云ふ。男爵は、その約束といふのはベルタといふ女であらう、そんな魔性女に釣られて悔いなと云ふも待たず、出て行つて了ふ。第二場、湖水に近い草原の夜半、月明りに海と白雲を冠つた山とがうすく光る。ウンテルワンデンを代表したメルヒタアルが武裝した十人を率ゐて來る。十人の內にバウガルテンも交つて居る。湖を橫ぎつてスタウフアッヘルが十人の武裝者を從へて來る、兩方の人々がよく來てくれたと親しみある。メルタアルは、スタウフアッヘルに親父にあつて、痛ましい眼を見ると、復讐の念が一層湧き立つた。それから何所へ往つても、旦那方が立たれるんだと聞いて、一も二もなく生命を投げ出しましたは、同志のものは、誰一人業を煮やさないものはないのですから忽ちに團結でさ、それから、私は、ロスベルクとザルネンの砦へ巡禮に化けてのり込み、內側を探つて來たと話す。ワルデルが、牧師レヨッ

セルマンや牧人クオオニ、獵人ウエルニなどとともに岩道を下りて來る。バウムガルテンはラルが中に居ないのを、不思議に思ふ。牧師の發議で、これは國會と謂ふべきもの故古式に倣つて會議せうと議長を選んで會議をはじめる。スタウファッヘルが瑞西の國民は北から飢饉の年に移つたものであること、三つの鄕土も一つ移住民の團體であることを語る、一同は、血も心も一つのわれ〳〵だと感情を高める、獨逸の保護はこちらから願つたのだが、今まで、理由なく壓迫せられたことは無い、先祖傳來、苦心してこれまでにした土地を墺太利人に遣つて耐るかと一同が憤つてゐると、牧師が墺太利へ降參してはどうかと持ち出すとそんなことを云ふものは瑞西から放逐すべしと云ひ、法律として、そんなことを今後口にするものは、國民たるの權利を奪ひ、交際を絶つことに決す。議長は、先づ王に直訴してみることを謀ると、シユキッのフンが起つて、既に試みたが王は、受けなかつたと云ふ。ワルテは、目的は、壓制を逃れ、もと〳〵の權利を得るにあるのだから、墺太利から錄

を受けてゐようと、小作をして居ようと、その方は、そのまゝ忠實に自己の義務責任を守つて、奉行とその部下を追つ拂ふことを目的とすればよいと云ふ。スタウファッヘルは、先方もじつとしては居ないから血を流さないで、追拂ひは不可能故、不意打するを得策とするといふ、ワンテルワンデンのマイエルが、先づロスベルグとザルネンの二砦を手に入れなきやならないと主張する。ウインケルリイトと云ふ者がクリスマスには百姓が贈物を砦へ持ち込む習慣だから、及物を隱して入り込み、うま〳〵いつたら、笛で合圖をすると、薔薇てゐる連中が一度に出て來て城を奪へばよからうと云ふ、メルタアルはロスベル砦の中に知つた女が居る、それの手で自分が夜中に砦に入るやうにしよう、一人入つたら、仲間を入れるのに苦は無いといふ、これに贊成者が多く、砦を二つ落したら山の上で烽火を上げる、それを合圖に、一味が集つたら、奉行は逃げ出さうと云ふと、スタウファッヘルが、他はともかくも、ゲツスレルは、容易に逃げる奴で無く、反抗するに違ひない、彼奴を生して居

いては、後々禍が絶えまいと云ふ。バウムガルテンが、そんな命がけの所へ私を向けてくれ、テル殿に救はれて生き延びてる生命だと勇ましい。スタウファッヘルは、それまでは誰も、いかなる目に逢つても、我慢をせよ、又、功を急いで先んじたら、同志でないと見ようと建議して、三十三人は曙方にリユウトリの牧場を去つた。

第三幕、第一場、テルの家、テルは大工を雇つて來ず、自家の一部分を修繕して居る。二人の男の子は、小弓を持つて遊んで居る。長子のワルテルは歌つてゐたが絃が切れたから、父に、なほしてくれと頼む、テルは、よい獵人になるものは、自分の弓は自分でなほすもんだと取り合はない。子供らは活潑に戸外へ出てしまふ。妻は子供の時から弓を弄つたりして困るといふ、それでよい、俺なんかも、内にじつとしちや居られない毎日新しい獲物を取らなきや氣がすまないと云へば、あなたの冒險には、妾、内に居ても、ひや〳〵する、今頃、雪崩に打たれてではなからうか、岩角を飛びそこねてゞはなからうかと妻が愛情を漏らす。この、す早い眼と神

樣を頼るものは心配は無用だと斧なんかを片づけて帽子をとつて出ようとする。どこへ行かれる。アルトルフのお前のお父樣の處へ。何をたくみに行かつしやる、あぶないことは止して下さい、何でもリユウトリでは會議があつたと云ふぢやないの、あなたも仲間に違ひない。その會議には行かなかつたが、危急の場合にや勿論出るさ。あなたはいつでも一番に險難の所へ廻されるのだ、いつかは、暴風雨の最中に舟で湖水を横ぎつたりして、あなたは妻子が可愛くないのね。可愛いから人の爲めにも思ひやりがあるのさ。あなたが難儀な場合におもひやりはしてくれませんよ。行れるだけのことをやつて、あとは神だのみだと問答し、弓矢を持ち出ようとすると、子供が歸つて來て、どこへ行くのかと尋ねる、アルトルフのお前達のお祖父樣の處へ行く伴れていつてやらうと云ふのを遮つて妻君は、今日はあそこに奉行が來てゐるから、逢はないがよいといふ。然し、父上に會ふ約束がしてあるのだ、正直にしてゐて、何も奉行が恐ろしくはない先日も、シエッヘンの谷の絶壁で不意に彼

に出逢つたら、彼は、恐れて慄へてゐたよ、そして、俺に先へ通れといつたよと笑ふ。そんな弱味をみられて居ればなほさら、何をするかも知れない、今日こそ獵にでもお出でなさいと止める。二人の子は父にすがりついて早く行かうとする。ワルテルお前はお母さんを家においとくのかと叱るやうに云ふとお祖父樣から土產を貰つてきて上げると早くも戶外に出る。弟は、母の膝に殘る。第二場、山谷の森林に獵の群から遠ざかつてベルタ姫が一人立つてゐるのを、ルウデンッが追つて來る。ルウデンッが、やつとのことで二人だけになりました、日頃のおもひをうちあけてしまひます、御承諾がなければ、それまで長いわかれと致しませう、どうしてそんな目をして御覽になる、馬鹿な若者が、だいそれた望みを掛けるとおさげすみか知らないが、胸の誠は誰にだつて讓らない私ですと口說けば姫は、あなたに誠があつて耐りませうか、塲太利へ裏切りして人民塗炭の苦しみを知らぬ顏で居るやうな國一番の不實物にと誇る。案外に呆然としてルウデンッは、かう云ふやうに決心した

のも、貴女が得たいばかりだのに察して下さいと哀訴する。賣國奴と契るほどなら、貪慾非道の奉行の枕の塵を拂ひませう、妾は、貴方の國の人々の悲慘な運命に同情して、どれほど塲太利の無理惡道を憤つてゐるか解りませむ、もしあなたにして本性に立歸り、祖國の爲めに愛されるならば、塲太利の城へ入れられぬ前にあなたの許に奔りませう。妾の領地はこゝに近い所に在る瑞西が自由になれば妾も自由になれるのです、眞心から妾が望みなら、時を移さず、男らしく、祖國の爲めに戰ひなさいと勵ます、ルウデンッ長い夢から覺める。第三塲、アルトルフに近い草原に、竹頭に帽子を冠せ、兵士が二人、こゝは大勢の人出がある所だつたが、帽子に禮拜を強いるやうになつてから、氣の利いた人は寄りつかないで馬鹿らしいと云つてる所へ、百姓女が三人子をつれて來て、帽子に禮をさせる。番兵が叱つて去らしめる。そのあとへテルが子をつれて來、まだ帽子に氣がつかない。子のワルテルが山の無い國があるかと尋ねる。その山の所から川に沿うてゆくと廣い土地があるが、どん

なに廣くつても土地は僧正や王のもので山でも川でも獵漁は出來ない窮屈極まるそこよりこの山國の方がよいぞと話しつゝ來ると、子供が帽子をみつける。そんなものに構はず行け〳〵と云ふ時、槍をつき出して、番兵が、帽子に敬禮を怠つたから牢獄へ入れるから覺悟しろといふ、子供が大きな聲を上げて、牢屋と聞いて助けを呼ぶ。この前、夜の會合に列つた牧師、レヨッセルマン及びペエテルマンやテルの岳父、ワルテル・フユルスト少しおくれて、メルヒタアルとスタウフアッヘルとが來る、番兵が、帽子に禮をしなかつたから、牢屋へ引くのだ、これが吾々の義務だと云ふ。メルヒタアル等がテルを伴れてゆくなら行つてみろと威す。奉行が折惡しく來る。番兵は一層叫ぶ。奉行ゲッスレルが馬上に獵用の鷹を持つてベルタやルデンッその他武裝した一隊を從へて出で來る。番兵は得意顏に、テルが帽子に敬禮をしないので、牢獄へ伴れようとすると、村人が邪魔をするのみか、奪ひ去らうとするといふ。代官はテルに、こゝに帽子を竹頭に掲げて置くのはそちらの心を試さうた

めだ、その帽に無禮をしたからには、帝及びその名代たる某を侮辱したもの、それで汝の胸に善からぬ謀略のあることも判然ぢやと睨む。テルは、つい氣がつかなかつたので、禮拜をしなかつたわけで決して、そんな蔑んでどうのかうのといふわけでない今後氣をつけますれば今回は御免下さいと詫びると、テル、そちは聞こえた弓の名人ぢやさうなと奉行が言葉を轉じたので、テルの子は、さうですお父樣は百歩距つた所から木の枝の林檎を射落すのですと云ふのに奉行は目をつけ、これはテルその方の子か、外にまだあるかと尋ねる、一人弟があります、どちらが可愛い、どちらも可愛うございます、さうか、それぢやこゝで、弓の藝をみせてもらはう、この子の頭に林檎をのせてそれを初の一矢で射落せよそれが外れたら、そちの生命はこちらへ貰ふぞと云ふ。人々はその殘忍酷薄に驚く。テルは、それは殿樣、あまり無慈悲でございます、親に子の頭を射よとは、お戯れでござらうと云ふと、何が戯れか、そちの豪膽なことを聞いてゐて、考へてやらせるのだ、早く行れ、ベルタ

がそんなことはおよし遊ばせと、ゲッスレルを止めるが、きかないで樹から林檎をもぎとり、今日は八十歩にしてやると云ふ。馬係りが、心を揉んで、小さい子に詫びを云はせようとする、姫は奉行に、どんな禍があつてもこれ程になさつたら澤山だと止めるが、承知しない、メルヒタアルは、腕力にも訴へかねまじき有樣なので、ワルテルが制して、奉行の前に跪き、私の財産全部さし出してもよいから特別のお慈悲でこの不屆者の今日の不調法を御許し下さいと願ふ、テルの子は元氣よく、御祖父樣、そんな意地惡い人にお辭儀をせむでもよい、ワルテルはちつとも恐くは無いお父さんの矢が間違ふものですかと平氣でいふ、スタウファッヘルが御奉行にはあの子を憐れとは思し召さないかと云つても聽きもせず、あの小童を菩提樹へ縛りつけよと云ふ。子は縛られるのはいやだ、縛つたら、ちつともぢつとしちやゐないであばれてやると叫ぶ馬係が目隱しをといふと、矢を恐れると思つて目隱しなんかさせると云ふのでせう、恐いものか、ぢつとしてゐるよ、お父さん早く腕を見せて

おやり、と菩提樹の下へゆく、家臣が林檎を一つ頭上に載せる。集つた人の中でもメルヒタアルは、我慢しきれないといふ風で、彼の夜の誓はなんになると云ふ。スタウファッヘルが制止する、ゲッスレルは早く〳〵と急ぎたてるテルが、矢を執つたが、奉行にあの子に矢を向けることは御免なさい、そのかはりに此の胸を刺してもらひませうといふ、ゲッスレルは、暴風雨の最中に船を出す程の船も名人だ弓も名人だ、その弓の妙で自分を救へと云ふテル長嘆息して、手を震はせ奉行を睨んでから二本の矢を用意する。子は、父ちやん早くお行んなさい恐いもんかと樹の下で叫ぶ。あゝ今射るよと矢を絃に番ふ。この時ルウデンッが彼の從者の中から出て、これで御中止なさい、罰も過ぎると、不利であるととめようとすると、默れ、汝の意見なんか聞く耳持たぬと叱る。いや默りませぬ、拙者は皇帝をこそ敬へ、人民にかほどまで、苛酷な貴殿を憎まずには居られない、これは權力の亂用だ。默れ入らざる口出し控えろ。いや今迄忍耐してゐたが最早耐えられぬ皇帝の意をあやまり國

家を害するものは捨ておけないと爭ふ、ベルタ姫がそんなことを今こゝで有仰つては奉行樣のお憤怒を增すばかりと制止しようとするとルウデンッはわが君主は皇帝ばかりだ、この奉行ではない、われは、祖國を棄て、愛情深い叔父に別れ、貴公の方へ附いたのも國の利益を思つたからだ、然るに今こそ夢が覺めた、罪の無い良民を何のかのと難癖をつけ、殺さうとするは忍び難い、と述べたてると、主人の惡口を主人の前で云ひ居るか、この愚者と顏色をかへる。主人とな、何が主人だ、主人は皇帝あるばかり、我が素性は汝より下りはしない、こゝで及でお對手もしたいけれど名代といふ名に對して控えるが、そこらの百姓達の赤手と違ひわか手には劍がある御家來衆一人殘らずお對手を致さうと用意をするその時、林檎が落ちた、小供は無事だと云ふ聲が人々を驚かす、子供の祖父のワルテルがほつと安心して倒れむとするを姫が支へる、奉行ふりかへつて何んだ射つたか、あの氣違ひ奴と云ふ、子供は林檎をもつて、父の方へ、そらこんな樣に矢が當つた、お父さんは巧いんだも

の、頭なんかに當るものかと呼んでゐるのをテルは、搔い抱いて、前に倒れる。一同安心とともに、その妙を賞め讃へる。馬丁が林檎を奉行に見せると、ホゝ見事に眞中を射たな、然しテルお前に問ふことがある、何故二本の矢を用意したかと云ふ。弓矢の作法でとゞまかすと、さうぢやあるまい生命は確に助けるから白狀しろと云ふ、テルは、さらば申し上げます、萬一子供を射殺したその時は、殘る一矢は奉行殿の胸へと用意しましたと答へる。よし、生命は取らぬと申したが其の惡心を抱く奴を自由に徘徊させることはならぬ、牢屋の中へ打込んでやる、物ども此奴に繩うつて、彼の舟に載せキユスナハトへ運べ、俺もその舟に乘つてゆくぞと命じる、牧師がその不正當を詰ると、お前達で、謀叛を計つてゐることは、此の眼で、早くから睨んで居る、今日はテルだけ捕へてゆくが程なく同罪者を悉く殺して遣ると云ひ棄てゝ、家臣等を伴れて去る。

第四幕、第一場ルツエルン湖東岸、巖石疊み重なつたる所に、狂ひ荒れる湖面を

前に漁夫父子と他の一人と語つてゐる。漁夫がそれぢや、テルが縛られて、キユスナハトの牢屋へ遣られるのを御覽になつたかと云ふ。さうだ、代官も一緒に乗つたが、この荒れぢやどこかの陸へ上つたらう、テルは捕へられるし、噂によれば、アイティングハウゼンの男爵も、御老體で昨今危篤だと云ふことだと話して去る。漁夫は、何といふ世になつた、頼みに思ふ人は、ぶち込まれたり、死んで逝かれたり、こんなさけない世は、打潰れてしまへ、風も荒れ、氷山も流れ出よと云ふ。子供が、荒れ狂ふ湖上に一つの船を認めて、旗と赤塗とで、ちやんと解る、奉行船だよと云ふ。荒れよ〳〵、ぶつ反れ、汝はあんな船の爲めに祈禱なんかするな小僧と云ふと、テルの小父さんの爲めにするのぢやと云ふ、いよ〳〵難所へさしかゝつた、テル殿は名高い漕手だが、縛られて居ちやどうにもなるまいなどと、しきりに海の上を見て氣を揉んでると、子供が、岩の上に一人の男が來て倒れたのを見つけて、父に告げる父子が駈けよつて抱き起すとそれはテルであつた。テルは、舟から、逃

げて來たのだと語る。いよ〳〵難所へ來た時に一人の奴が、これぢやとても誰も助からない、テル殿の縛めを解いて一つ陸へ付けてもらひたいと云ふと奉行の奴が、一同を助けたら許してやるといふから、よろしいと、弓矢のある所を睨んでおいて、船頭を指揮して、逃げるに便利な岩を探して、そこへ漕ぎ寄せ弓矢をとつて岩へ片脚かけるや片脚で舟を大波の中へ蹶り出してこゝまで來た。舟の中で聽いてゐたら、ブルンネンで上陸してシユキツツを通つて城砦に歸ると吐してゐた、それなら、萬一彼等にまた見付かつたら、助からないといふと、心配してくれるな大丈夫だ、それよりキユスナハトへの近道を敎へてくれよと云ふ。ローエルツが最も近い、こりや悴テル小父さんを案内せよといふ。テルは漁夫がリユウトリの盟の一人だと知つて、どうぞ頼むから、女房に俺が無事で逃げたことを知らせてくれと云ふ、そしてこれからどこへゆくのだときくと、今に皆に解ることをするよと云つて、少年漁夫に案内させて去る。第二場アツディングハウゼン男爵が、危篤なので、ワルテル・フ

ユルスト、スタウフアッヘル、メルヒタアル、バウムガルテン等が枕頭で看護する。テルの子も近くに座つて居る。テルの女房が、子にあはせてくれと駈け込んで來て、子供にとびつき嬉しさを隠し得ないで抱いて喜び同時にテルが、子に矢を向けたことを非難する、ワルテルや、メルヒタアルがテルの胸の中の苦しさをも考へなさいと云ひ、バウムガルテンが、御主人は、それればかりぢやない縛られて引かれなさつたと云ふと、あなたをば大暴風雨の日に助けて上げたのに夫が拘引されるのを、見てでさつたかと詰る。ワルテルが宥めても昂奮してゐるので、窖の中で、病氣になつて主人は死にますといふ、スタウフアッヘルが、心配なさるな皆で救ひ出す約束をしてゐますとなだめる。頻死の男爵が目をあけて、甥はこんな時にも來ないかと慨く、ワルテルが、御安心なさいあのお方は御改心なさいましたと先日の態度に僞りのないのを見てゐるから告げると、喜ぶ。そしてこの子は誰だといふ、ワルテルが、孫でございますと云ふ。ワルテルが陰謀を男爵の耳に入れる、それで安心して

死ねるこの子の小さい頭からも新しい自由が湧くだらうと手を頭において云ふ。それから、ワルテルとスタフアッヘルに握手させて結んで解けなよ同志の面々もしつかりやつてくれ一致協力してなと云つて呼吸が絶える。そこへ、いきせき、ルウデンッが來て、既におそかつたと知つて死骸にとりついて悔いる。スタウフアッヘルが御改心のことを申し上げたら喜んで御果てなされたと説明する、ルウデンッは死骸に向つて、赤心を以て國に盡すと誓ひ、ワルテルとスタウフアッヘルに握手を求め、更にメルヒタアルに手を出す應じない、側から勸められて手を出す、そして早く敵を追ふことに着手しなきやならないといふが一同は默つて終ふ。乃で、ルウデンッは隠しても知つてゐるぞ、リユウトリの盟ひを如何する打明けて話してくれ、ぐずぐずして居ちや、此方が損だ、自分はこれから擧行するといふ、叔父上の葬式は、目的を遂げた後、そのことを告げてからにしたい。急ぐ理由は、心をかけて約束まで、してゐるペルタを奉行がつれて行つて今ごろは羞めようとしてゐるだらう。彼女

は、一方ならぬ瑞西最負ぢや、力を借して呉れ、どこに囚れてゐるか判然しないが
砦をどれも破つて行けば、彼女の牢屋へも行けるだらうと云ふとメルヒタアルは、
かうなつたら、誓約の日を變へたつて構ふものか、一緒に參りますと立ち上る、ル
デンッがお二人は早速用意をして合圖の烽火を待つて下さいと云ふ。第三場、キユ
スナハトに近い山道にテルが弓矢を以て岩の上に立つて、必ずこゝをゲッスレルが
通るに違ひないから、この一矢で殺してくれる。今まで人間に向けたことの無い弓
矢であるが、彼の如き暴虐無道の惡人を生して置いては、この後の瑞西がどうなる
か想つて見ても恐ろしい、先づ彼が、可愛い妻子を明日にも殺さうとするは必定、
あの子の頭に林檎を載せて射れと急き立てた時、神樣にゲッスレルを射殺すことの
御許しを願つた。今日こそ、こゝで、射殺してくれる。道が狹く、追手が容易に近
寄れず隱れ場はあつらへ向きだ、長らく、役立つてくれた絃よ、しつかりしてゐて
呉れこの矢もだ、二の矢の用意が無いのだからこれで射損じたら、身の破滅だ、よ

く目的を貫いてくれと心に念じてゐると、切通しを婚禮の行列が騷ぎ立つて通る。
通りかゝりの人と、話してゐる所へ、百姓の女房が子をつれて出て來て、奉行に願
ひがあるのだと云つて居る時、奉行の先拂ひが下れ〳〵と叫んで來る。テルは姿を
隱す。女は馬上のゲッスレルの前に平伏して、お願ひでございます亭主は草刈で、
別に惡事もしないのに、半年も牢に打込んだまゝでございます、亭主を戻して下さ
らなきや、どんなことがあつても動かないと、威しても、退かない、踏殺すぞとい
へば、生きて居るより殺された方がよいと子供とともに地上に横になり惡いことば
かりしなるお前さんには、蹂み殺す位は何でもなからう、此の國を久しい間蹂みに
じつて居るお前さんを男なら生かしちや置かないにと、死を覺悟してゐるだけに强
い、家來ども早くこの女をはね退けよといつても家來は、狹い道のことゝて婚禮の
行列やそれを見る群衆に妨げられて、續いてゐない。むら〳〵と憤怒の相を表して、
猛り立てた一瞬、テルの放つた矢が、鳴つて來て、彼の胸に立つた。やられたと云

ふので、馬係りが氣づいて、うろ〳〵すると女は喜んで、手も鳴らさむばかり、奉行は、テルにやられたと云ふ、テル岩の上に出て、これでよい射つたのは、確にテルだよと姿をかくす。ゲッスレル絶息する。

第五幕、アルトルフ近くのまだ落成しないウウリの城砦に、漁夫ルオオデイ獵夫ウエルニ牧人クオオニ、大工、石工、女子供等集つて遠山に上る烽火を見て、どこも味方の大勝利だ、こゝだけ、こんな砦を殘して置いて笑はれるなそれや打破せとなは大勢を呼び寄せる合圖をする、ワルテル●フユルストも現はれる。テル殿のおかげで、鬼奉行が地獄へ落ちたからにや、味方の大勝利ぢや、ぶつ壞せとたゝきこはす、メルヒタアルとバウムガルテンとが來てメルヒタアルがワッテルに向つてロスベルクの砦も、ザルネンも、滅茶滅茶に破つてしまつたサルネンの方は、ルデンツの若樣が、大層なお活動でしたロスベルクへは私が掛りました、大勝利のうれしさに火を放ちますと、小姓が一人ベルタの姫樣が燒けてしまはれるといふ、それを聞

かれたルウデンッの若樣が、火の中に女の泣聲がする方へ進まれる。他の奴なら捨てゝも置かうが、こつちがたの若樣の思ひ込んだ方でして百姓思ひの姫さまだ命なんか入るものかと私も飛び込んで、若樣とお二人で救ひ出しましたら、火の中で若樣が私の胸へ抱きついて、堅い誓ひをなさいましたと物語る。奉行のランデンベルヒはどうしたかとワッテルが尋ねると、メルヒタアルは、逃げるのを途中で私がつかまへて刀を上げたその時に、盲目の父親は自分の眼をとられた怨みも消してしまひその後悔して命だけ許してくれと縮んでゐる奉行をあはれむで助けて上げよといひますので、ちかひをさせて許したと話す。女の子が竹の先に、帽子を揭げてもつて來る。燒いてしまへ、破つてしまへといふが、この帽子故、孫の生命が危なかつたのだ殘して置かうとワルテルが手に取る。一同がリユウトリの盟約が實現せられたと喜ぶ所へ、スタウフアッヘルと牧師とが來て、墺太利王が、甥に殺されたと告ぐ。

第二場、テルの妻が、炊事をしつゝ子のワルテルとキルヘルムに、今日は、お父さんが生きて居て、お歸りになるめでたい日だよ、お父さんは國の爲めに、あの弓矢で立派なことをなさつたのだよと云ふ、長子は、林檎を頭にのせて、じつとしてゐたことを話す、そこへ、僧服を纏つた一人の怪しげな男が立寄る。子が坊さんが物貰ひに來たよといふ、母はコップに酒をついでもつて出る。僧がこゝはどこかと子に問ふ、子がウウリのビユルグレンで、シエッヘンの谷の口だと敎へる。僧は入つて來たが、妻は早くも、その態度の落ちつかないので、僧服は着てゐるが僧でないと見て、子供を遠ざける。テルが歸つて來る。子が駈けつけて、抱き付く、テルが妻にやさしい言葉をかける妻は夫の手は、尊敬すべき手だと敬意を表す、テルは僧に氣づいて誰かと問ふ、知らない氣味の惡い人が今來たばかりだといふ。その男がもしあなたは奉行を射殺したテル殿ではないか自分もお國の爲めに人を殺して來たものだと云ふ、テルは妻子を遠ざけて、それでは墺太利の皇帝を亡きものにせられ

た皇帝の甥御でござらうと云ふ。彼は、推察通りだ、この國の爲めに盡した身だ助けて呉れといふ。テルは、あなたの殺人は私慾の爲めで、私のは、やむを得ない人道の爲めの人殺しだ、あなたのした事には反對はしても同情しないと云ふ。そんな人はこの清淨な家へ長居をしてくれるなと道理を諭す。行き所の無い彼は、尙あはれみを乞ふので、テルは伊太利の羅馬に行き法王に救ひを請ふのが最も適當だと、道筋を敎へる。この時音樂の響が近くなり、三鄕の人達が此の家へ來る。テルは妻を呼んでこの人を別室で御馳走して上げよ、長い旅を續けられるのぢやと云ふ。第三場、テル家を圍んで、群衆が喜ぶ。ワルテル、スタウファッヘル、メルヒタアルなどが先頭で、テルを圍み、すがり、抱き、テル殿萬歳、國救ひ萬歳と歡喜する。ルウデンツとベルタとは衆の前で結婚を誓ふ。最初からこの結末まで、どの幕も緊張して居てシルレルの戯曲的才能の非凡と優越とを嘆賞せしむるに十分である。

ゲエテの『井ルヘルム・マイステル』

ゲエテの井ルヘルム・マイステルはその『修養時代』と『遊歴時代』との二つに分れて居る。彼が自傳を作らうと修養時代に着手したのは何時か、判然しない。一千七百九十二年頃までは、『キルヘルム・マイステルの演劇的使命』といふ題命になつて居た。多分、これに着手したのは、彼が、二十八歳の頃であらうと云ふ。爾來、中止して居た年もあり一千七百九十六年に修養時代だけは脱稿した。遊歴時代は一千八百七年頃から、氣の向いた時に少しづゝ書いて――二十九年に脱稿した。かやうに長い間、彼が書いたものであり、事件も相當に複雜であり描かれた人物も多い。

キルヘルム・マイステルに妹が在る。その妹とエルネルと云ふ男とが戀仲になる。キルヘルムは、マリアアネ（この女優には、ノルベルヒと云ふ男が所謂旦那として生活の助けをして居る）に愛着して、子を孕ませる。この女優に召使バルバラと云

ミニヨン

ふのがある。キルヘルムは或夜、戀女の所から出て來た男を見て、女優の情夫だと思ひ込み、又、戀女の許から持つて歸つた襟卷に、ノルベルとから女優に宛てた手紙があつたので、いやになつてしまふ。キルヘルムの媒介で、或商人の娘を妻にした所のメリナが、俳優になつて劇團を組織した。旅先で、メリナに遇つたキルヘルムは、その劇團の舞臺監督になる。キルヘルムは劇場座長セルロの許に行き座長の妹、アウレリイを知る。此のアウレリイが病む。キルヘルムは、病女から、昔の戀人ロタリオに宛てた手紙を屆けることに當る。此のアウレリイに、フエリックスといふ小さい養子がある。キルヘルムは、その子が自分と女優との間に生れたものであることをアウレリイの下女、バルバラから聞く。アウレリイの所に『美しい靈の告白』と云ふ寫本がある。その寫本中のフイルリスとふ女は、ゲエテが、多少クレテンベルヒをモデルにして書いたものだ。此のフイルリスの妹に二男二女がある。二男の一人たる、ロタリオは莊園の主人で、アウレリイを離れた男で、秘密結社を

組織する。殘る一人フリイドリヒは、メリナの劇團に加はつて居る、二人の娘の一人たるナタリイは莊園を有つて居り、今一人は某伯爵夫人になつて居る。此の伯爵夫婦が、客人たる某侯爵の爲めに、メリナ劇團を雇つて演劇を行らせる。その時、伯爵夫人は、舞臺監督たるキルヘムに懸想する。この劇團が賊に襲はれて、キルヘムが負傷する。その際、馬に乘つて通りかゝた美しい婦人が、キルヘムの爲めに、盡す。そのアマゾンのやうな姿が、キルヘルムの多年のあこがれになる。この騎馬の美人は、ブイルリスの女の子の一人で、伯爵夫人と姉妹である所の、ナタリイである。此の女が後に、キルヘルムと相思の仲になる。姉妹が時所を異にして、同一の男を戀したのだ。ロタリオの所に來たキルヘルムは劇場と緣を切りテレエゼといふ莊園の女主人に結婚を申込む。然しナタリイに接するに及び、この方に心を傾ける。

キルヘルムが、はじめ劇團に關係して居た頃、惡漢が、伊太利の貴族の少女を誘

拐して獨逸に伴れ込み、輕業師に賣つた少女を見て、それをその哀れな位地から救ひ出した。キルヘルムは、わが子と知つた所のフエリツクス及び、輕業師の虐待から救つた少女ミニヨン及び、竪琴彈きの老人とを心に掛けて世話をする。ミニヨンは、天女のやうな美しい少女で、キルヘルムを父の如くに慕ひ、又、敬ひ、一夕その側に枕を弄べて寢てみたくつて忍んで來たが、自分より先きに忍び込んだ女のあるのをみて、悲しくなつて、泣き顏をして、竪琴彈の翁の所へ行つて小さい胸を痛めた、可憐なものである。伊太利の故郷を戀ひ、そこへキルヘルムと往きたい願を表した歌がある。

君知りますや、その國を、
レモン花咲き、をぐらくも繁る葉蔭に
金色(こんじき)の柑子(かうじ)實(みの)りて、青空ゆ

そよ〳〵風の吹き來り、
ミルテの木立靜かにて、月桂樹高く聳えたる
國を知れりや知りますや
あゝその方へその方へ
われを愛する君と行かまし。

君知りますや、その家を、
圓き柱の屋根支へ
廣間も、せまき部屋も皆、
輝きわたり、石像の、われ眺めては、
『いとしき子、いかにしつる』と慰むる
家を知れりや、知りますや

あゝその方へ、その方へ
われ護ります君と行かまし。

君知りますや、山路を、
狹霧の中を驢馬進み、
洞に年經し恐ろしき、
大蛇のすまひ、嶮しかる、
巖に氷のかゝり鳴る、
山路知れりや、知りますや、
あゝその方へその方へ
われのやさしき父と行かまし。

この少女が、人に知らせず、キルヘルムを慕つて、胸を痛めナタリイの莊園で病氣になつて居るのに、そんなことを知らないテレエゼが、少女の前で、キルヘルムに抱きつき『あなたは私の良人です』といふ。それを目擊して、死んでしまふ。死後に、伊太利の公爵キブリアニがナタリイの所へ來り葬式の際その子の臂に在るクリスト像の小さい刺青で、自分の弟（その弟が竪琴彈の老人である）の娘であると知る。此の莊園にその頃又、來た、竪琴彈の老人は、自分が死なうとして阿片丁幾と、扁桃液汁とを混じたものをフエリツクスが飲んだものと思ひ違ひして、自殺する。フエリツクスが飲んだといふので、キルヘルムや醫者や、ナタリイが、小兒の死を覺悟して居るが死なない。子供は秘に、ナタリイにコップから飲まないで、壜から飲んだといふので一同安心する。壜は扁桃液汁であつたのだから。以前劇團に居た、ロタリオの弟フリイドリヒやロタリオ、ヤルノその他、伯爵夫人などが、キルヘルムとナタリイとの相思の情を知つて結婚させる。

遊歷時代の方は、キルヘルムがロタリオを主領とする秘密結社の意見に基き、新思想的勞働主義者の一人として旅にフエリツクスを伴つて出る。マカリイの莊園に行く。マカリイに甥がある。レナルドオと云ふ。其の戀女にナホヂイネと云ふのがある。レオナルドオはナホヂイネを尋ねると家を出て歸らない。キルヘルムはマカリイから甥を探してくれとの依頼を受ける。そして探し當てて、秘密結社の仲間に入れる。キルヘルムは外科醫になつて、さきにフエリツクスを置いて來た敎育州 Pedagogic Province へ行く。秘密結社の事業は大いに擴張して、亞米利加移住準備をレオナルドやフリイドリヒが計畫する。ナホヂイネは某工場の若主人に戀慕せられ妻になつたが夫が死んだ後、諸事を切廻して居た、美しい未亡人故、懸想してる男がある。レオナルドが工場に來て探して居た彼女を見つけて喜ぶ。

秘密結社に亞米利加へ移住する組と、獨逸で働く組とが生じる。キルヘルムは、移住する考であつたが、子とともに船に乘りおくれる。此の遊歷時代中に、色々、

小さい短篇が挿入してある。『聖ヨゼフの話』『新メルジイネ』『五十歳の男』『危い賭』『胡桃色の娘』『悪なる巡禮女』などそれである。これらの短篇中、面白いものもある。『修養時代』及び『遊歴時代』に於て、彼の自傳とも見るべき部分は修養時代の初めの方に多く、漸次、それが薄らいで來て居る。何にせよ、此の長篇小説は、彼の傑作中の一で、彼の約二十年に亘る努力に成り、彼の社會に對する意見などを諸所に觀ることが出來る。

長篇である故に、その順序を精細にこゝに語ることを避けるが、大略の事件の發展と葛藤とを記せば次の如くである。

興行が夜おそくまであつた。女優マリアアネの女中が馬車の音がしたので窓に倚つて見る。主人のマリアアネが、若い士官の裝ひで歸つて來た、女優の生活を保護して居る、ノルベルヒが小包を贈つて來てゐる。そんなものより、若いキルヘルムが今夜來るのを待つ心が一杯である。商家の息子のキルヘルムが、忍んで來る。次

はキルヘルムの宅で母が、息子に、お前が、演劇が好きなので、お父樣は、彼子をあんなにしたのは、十二年も前にクリスマスの贈物として、人形芝居の玩具を與へたからだと叱られると云ふ。キルヘルムは、人形芝居のことは、新宅で第一の樂しみであつた、お母さんの愛や心盡しを後悔なさるに及ばないといふ。若者は女優に對する戀以外に殆んど何もない。思ひ出すと、耐らなくなつて飛んでゆく、父が結婚を承知しさうにないので、逃亡しようと心に用意をする。彼の父は、息子を旅に出さうとして乘馬を探して居ると幸に負債の代償に馬を收めたいといふ商人が現れたので、息子をその馬を取りに出す。その家へ行つて見るとその家の娘が俳優のメリナと驅落をして捕へられ、不義の報として娘は嫁入支度が貰へない上に叔母からの遺産を五年間親父の手に渡して置く契約をさせられた。この娘の繼母が、メリナに惚れてゐたのであつたことも解つた。キルヘルムが親達を承知させて二人を夫婦にした。メリナは俳優として何處かの座に加はりたいといふ。或夜キルヘルムが、

女優を訪ねると氣分が惡いといふ。今夜再び來ると云ふと拒むので、そこに在つた女の頸帛を掴んで衣嚢に突込み彼女の唇から離れて歸り、衣服を換へて戸外に出ると未知の人が宿屋の所在を尋ねる、その人と酒を飲んで語つて居るとその人は彼の祖父を知つて居る人だつた。別れて町を歩いて居り漂浪の藝人の群に出遇ひ、それを女優の家の前の廣場へ伴れてゆきそこで演奏させる。そして歸らうとするとマリアアネの家から一人の男が出た。キルヘルムは家に歸り、衣嚢に收めた頸帛を出して接吻しようとすると一通の手紙が落ちた。それを見ると、『昨夜はどうでした』とか、『今夜も來る』とか、『年の市までには歸つて來る』とか、『あの鳶色の短衣は二度と着てくれるなエンドルの魔女のやうでいやだ。この兩腕で白い小羊が抱きたいので白い寢間着を贈つたのだ』とか、『手紙は例の巫の婆の手を經るやうに出して呉れ』とか書いてあつた。これを見て、立腹し、女優との戀の記念物を燒き拂つた。彼は商業上の用向で、旅に出て、或旅館へ宿り込むと、輕業師の一行が町廻りや何かで

騷いで居た。隣りの宿にフイリイネといふ美人が居て、キルヘルムの髪の亂れを治して呉れなほ髪剃刀も呉れたその柄には『お忘れなさるな』と彫んであつた。ラエルテスといふ男とも懇意になる。輕業師の伴れて居る少女に、裁り裂いた西班牙式の袖の短い絹のチョッキ飾緣のついた長ヅボンをつけ、長い髪を辮髪にして頭のまはりに捩つて卷きつけて居る十二三歳に見える人を魅する眼、神秘的の顏、美しい鼻をもつたのが居た、フイリイネが自分の部屋に伴れてきて、名を尋ねると、皆がミニョンと呼びますといふ年を尋ねると誰も敎へないといふお父さんはどんなお方なのといふと『大魔は既に亡くなつた』と不馴れの獨逸語で妙な返事をした。翌日、綱渡りの親方がミニョンを地に引倒し鞭の柄で打つて居るので群衆をわけて、キルヘルムが進みより、その子を放さないなら僕と決鬪しろ、汝は、どこからこの子を盜んで來た、裁判所で明になるまでは、指一つ觸れさせないと云ふと親方は恐れ入つて、彼女に買つて與へた三十タアレルを拂つて下さるならあなたに引渡す、卿踊

りをしないといふからこの有樣だと折れて出たので、買取ることにした。翌日、どこに隱れてゐたか、藝人の一隊が去つた後、キルヘルムとラエルテスと劍闘の稽古をしてゐる時、そこへ姿を表した。キルヘルムは早速ラエルテスと自分との給仕代りに此の少女を使つた。フイリイネの豐麗とミニヨンの神秘的淸麗とを喜んで、此の宿になほ滯在してゐると、メリナの一座が來た。或老人の役者は、マリアアネと同じ座に居た人なので、マイステルはマリアアネが懷姙して一座から棄てられた話を聞く。此の夜、ミニヨンはキルヘルムに、西班牙踊(ファンダンゴ)の妙藝を見せた。それに感心して養ひ子としようと決心した。キルヘルムは懇意な人と一日舟遊びをして舟中で即席芝居をしたら。乘合せた牧師風の男もそれに加はつた。舟から歸つた夜、宿の主人が黑褐色の長衣を着た痩せた靑い眼長い眉長い白髯の竪琴彈の老人を紹介した。此の老人が、琴に合せて

『何ぞ門前に聞こゆるは

何ぞ橋の上に響けるは
聽かまし近く廣間にて
ひゞきかへれるその歌を』
かく云ふ王のみ言葉に
小姓は急ぎ走りたり
小姓來ぬれば王云ひぬ
『こなたへ伴れよ老人を』

と歌ひはじめた。(この詩は樂人 Der Sänger と題して、ゲエテ物語詩中有名なものである) 一同此の老人の技に感じる。キルヘルムが老人の宿を訪ねて歸ると、フイリイネは主馬頭と懇意になつて睦じさうに晩餐を共にしてゐた。メリナが、舞臺道具の賣物があるから、是非三百タアレル出してくれとキルヘルムに懇請するので、手形を渡す。この頃フイリイネに思を掛けて居た一人の少年が主馬頭とフイリイネ

の仲を嫉妬する。ラエルテスが、それを嗾す。キルヘルムは、いつまでも此の宿に居られないと思ひ出立しなければならないと云ふとミニョンが、泣きくづれて、『お父さん、妾をみすてないで下さい、妾のお父さんになつて下さい、妾あなたの子供よ』なぞといふ。かゝる時に、竪琴の響がして老人が、マイステルに夕の捧げものとして歌ふ聲が聞える。

伯爵が、侯爵が見えるについて劇演を催したいといふので、メリナ一座が伯爵の前に並んでお目見へをする。役者でないキルヘルムを、フイリイネが呼びに來たので伯爵の前へ出ると伯爵夫人が忽ち惚れる。伯爵の代理として演劇の方の世話をすることになつて居る男爵が來て彼と懇意になる。彼も一座と共に伯爵家へ行くことに約束する。伯爵家へ一座が行く日、大雨で一同が難義をする。ミニョンが空腹で、弱る。伯爵家で罷職大佐のヤルノとキルヘルムと相知る。伯爵夫人の彼に對する思慕の情は日毎に惜して來る。浮氣な男爵夫人は、ラエルテスに惚れたりヤルノに懸

想したりする。或時、伯爵の假裝をして伯爵の部屋にキルヘルムが居ると、不意に本物の伯爵が、その部屋に來たので驚いたことがある。伯爵は自分の氣力が衰へて自分の眼に自分が見えたのだと思つたので、事無く納まつた。この事は伯爵夫人に假裝のキルヘルムを會はせようと男爵夫人等が企てたのであつた。ヤルノが、彼にシエエクスピアの作品を讀ませる、大變感動する。そして演劇の仲間に加はる。伯爵夫人は、彼に戀情を打明ける、彼と夫人とは相抱き接吻する。伯爵家の演劇から、メリナの一座には、彼以外に、ラエルテスも、フイリイネも加はつたのである。伯爵邸から一座が他へ移る道中、森の中で、試合刀を取つて、彼とラエルテスとがハムレツトのクアルテイスの戰を演じてゐる際、銃聲に續いて一群の盜賊が寄せかけた。彼は胸と左腕の間へ來た彈丸に傷き倒れた。氣がついて見ると、フイリイネが膝の上に抱きミニョンが脚を抱くやうにして泣いて居た。その際一人の美しい騎馬の女性が一老人と數人の騎馬車及び馬丁驃騎兵などを從へて通り掛りて、隨行中の

外科醫に命じて應急の手當をさせ、自分の外套を脱いで、彼に着せた。外科醫が傷の中の彈丸を除く時、フイリイネなぞ、比較にもならぬ程、美しい女を見つゝ意識を失つた。氣がついた時には既にアマゾン的美人は去つて居り竪琴師の老人が百姓をつれて來た。村の宿屋で、メリナ夫人が分娩する。仲間から、フイリイネが憎まれて去り、ミニヨンが代つて看護が出來ると喜ぶ。騎馬の美人は誰であらうかと聞かせても分らない、殘して呉れた外套のポケットに、美人から叔父宛の書面が在る、手跡は伯爵夫人に似て居るが更に奔放の妙がある。

彼は常設劇場座長セルロを訪ひ、メリナ一團を雇はせようとする。座長に、アウレリイといふ妹が居て、キルヘルムを大變好いて友人になつて呉れと泣きつく。そこへセルロが、フイリイネを伴れて來るので、彼は又、こゝで彼女に遇つた。アウレリイは或貴族と戀をしたと云ふ噂があり、彼女の膝のあたりに、フエリックスといふ美しい眼と健康らしい頬と金髪をもつて居る可愛らしい子が居た。アウレリイ

が病氣になる。ミニヨンとフエリックスとは、大變睦じくなる。セルロは竪琴彈の老人とミニヨンの藝に目を附ける。故郷の友人エルネルが、キルヘルムの父が亡くなつた。自分は君の妹さんと夫婦になると知らせて來た。キルヘルムが演じたいと希望したハムレットを演じた。その演劇中、必要な場合亡靈になつて舞臺に出た者があつた、非常に巧妙であつたが、誰だかそれを演じたものが判然しない。兎に角、好評を得たので、一座が祝宴を張つた。その夜は、ミニヨンも、平常に似ない、はしやぎやうをした。キルヘルムが歸つて寢ようとすると、フイリイネが忍んで來たものか、彼女の上靴があつたが、彼女をば認め得なかつた。或日、ミニヨンが彼の所へあはたゞしく火事だといつて來た、この際竪琴彈の老人が狂氣してフエリックスを殺しかけたのをミニヨンが見て來て彼に救へと云つた如何にもその態度が怪しかつたので老人を田舍の牧師に預けた。或日キルヘルムと、セルロとがフイリイネの家を訪ねると、フイリイネが若い士官服を着た人と抱擁してゐた。それは女だと

いふのでマリアアネが赤い士官服を着けて居たことを思ひ出してその士官服の人に面會させよといふと、明日面會させてよければ手紙で知らせると云ふ。翌日、芝居が終つてから、行つてみると、フイリイネはその赤い士官服と逃亡して居ない。人を雇つて追はせたが、その人も歸つて來なかつた。ラエルテスは、その士官服は仲間のフリイドリヒ（ロタリオの弟）だよと云ふ。キルヘルムが、竪琴彈の老人を預けた牧師を訪問すると牧師の友人の醫師が、某貴族が、自分の妾を自分で見たと云ひ、最早長命覺束無しと財產を人に頒ち夫婦とも、ヘルンフウト教徒 Herrnhuters になつた。その貴族夫人は、若い男に惚れてゐて、それと別れる際、その若者が抱きつき夫のメダルの彫像を夫人の胸へ壓しつけた。それが、原因で、そこが硬く固まつて漸次惡くなると聞いて、伯爵夫婦に自分のしたことの結果の豫想外に多大なのを悲しむ。アウレリイの病氣は間歇的ではあるが病勢が漸次惡くなるので、彼は、牧師の宅で見た醫者を伴れて來た。此の醫者が『美しい靈の告白』と題した故人の

草稿を持つて居る。セルロとメリナとは、彼の藝術を重んずる主張よりも金を得ようとする故溝渠が日に深くなる。兄から、辛く遇せられたアウレリイが手紙を不實者のロタリオに屆けてくれと賴む。ミニヨンは誰に問はれても、身の上のことを云はない。その理由は嘗て聖母マリアに救ひを求めた時今後誰にも身の上を告げないと誓つたからである。そして時々、やさしい聲で、

語れといはで秘めさせよ——
秘むるはわれの義務故
君に告げまく思へども
許さぬ運命を如何にせむ。

あしたとなれば日の光

暗をば追ひて世を照らし
堅き巖も胸ひらき
底の果を湧かしむを

人のなすごとかなしみを
友のかひなに云ひもせば——
あはれ誓ひに云ひ難く
たゞ神のみに云ひ得るも

と歌ふ。ゲエテは『美しい靈の告白』を挿入して居るが説明を省く。

キルヘルムが、ロタリオの花園へと急いで居るとき、一人の男に出遇ふ。見たことがあると思ふと、これは曾て同じ舟に乗り合せた人であつた、此のアッベ Abbe

がロタリオの所への道を教へ、自分も、やがて、其の家へ歸るのだといふ。手紙をロタリオに渡す、此の男がアウレリイを見棄てたのは、女が柔和でなかつたのに由る。此の家の壁に難波船の繪が額にしてかけてあるその繪の中の一人の娘が例のアマゾンだと思ふ。ゲエテは朝食後、この家へ飛び込んで來た、ロタリオに戀をしてゐるリイディといふ女の口から、ロタリオが、女のことで決闘に行つて居ると知つた。歸つたロタリオの介抱人を見ると、それは、ヤルノであつた。外科醫が來ると、その器械の紐を負傷した峠で見たおばえがある。ヤルノが伯爵の話をする。こゝに於てロタリオの妹が伯爵夫人であつたことを知る。牧師の家で知合つた醫者も來る。竪琴彈の老人の事を尋ねると、ミニョンが、男裝をしてゐたので男の子だと想つてゐた間は怖れてゐたが女と知つて怖れないで、フェリックスを恐れる。男の子に何かの原因で反感を抱いて居るのだと話す。その翌日ヤルノが、男爵ロタリオの負傷に、あのリイディが附き纏つて居ては、わるい、彼女の親友にテレエゼといふのが

あるそれが會ひたくつて待つてゐると云つて此の家から伴れ出し、判事の家へ伴ひ、そしてテレエゼは今出發したと馬車で追はせる、それからは馭者が心得て居る、君一つ伴れ出しの任に當つて呉れ、そしたら、アマゾン的なテレエゼ嬢に遇へるといふ。テレエゼの所へ計畫通り、リイデイを伴れ込む。テレエゼは、ロタリオと結婚する話が進んでゐた際、テレエゼの母の(俳優で外國に在つた)寫眞を見て、母との關係を想ひ出して、結婚を中止されたのだと語る。この婦人の賢明なのに感心して、ミニヨンを預けることにしたいとおもふ。ロタリオの所に歸つて、何故、アウレリイとの間に出來た、あなたの子のフエリツクスを引取らないかといふと、ヤルノがあの子は、他所の婆さんがあの家へ伴れ込んだものだといふ。アウレリイの家に行きミニヨン、フエリツクスの間に居る婆さんをよく見ると、昔の戀女の下婢バルバラである。この下婢の口から、又、マリアアネの手紙から、フエリツクスは自分の子であると知る。なほ書翰を調べると、その後、女優から寄せた手紙をば悉く、妹

の夫になつて居るエルネルが横取りしたものだと知れた。ロタリオの所へ歸ると、土地購求に競爭者が出たがそれと共同購入をしたと話す、此の競爭者はエルネルだ。ロタリオ等は人道的秘密結社の一人なので、ヤルノに命じて、或塔の中に導き、そこで入社を誓はせる。此の頃、彼は、演劇團とは全く關係を斷ち、莊園の近所に土着しようと思ひ、テレエゼと結婚しようとする。テレエゼの親友であるロタリオの妹ナタリイから、ロタリオの所へ手紙で目下妾が預つて居る、ミニヨンが危篤だと知らせて來た。フエリツクスを伴れて早く行けとロタリオに促れて、マイステルが、行つて見ると、この婦人こそ、長い間、戀ひあこがれてゐた、騎馬美人であつたので、彼は、大いに喜んだ。ナタリイは、ミニヨンについて色々語つた。彼子の友達の祝ひ日にミニヨンに天使の裝ひをさせ、あとで脱がせようとすると、どうぞこの姿をこのまゝ許して下さいと六絃琴(ギタア)をとつて、次のやうな歌をうたひましたと語つた。

かくあらむまでゆるしませ
脱かせたまふな白衣をば
われ美しき此の世去り
いそぎ行く身よ地の下へ

そこにしばらく休みなば
わが眼光明にうち開き
脱ぎてぞゆかむ白き衣
帯も冠もことごとく

天なる群に入らむ時、

男女の別もなし
浄化りし身に衣はも
用なきものとならむかな

心配りは無かりしも
苦痛は深くありしかな
悩に早く老いつるを
常若の身となしたまへ

この家の額の繪姿からして、ナタリエの伯母が、「美しい靈の告白」を書いたフィルリスだと知る。例の醫者が、此處にも來てゐて、「あの娘は自分の生國と貴公とを憧れる外何もなかつた。そして貴公は、ハムレット劇の行はれた夜、女の訪問を受

けたであらう、その婦人の誰たるかを御存じか』と云ふ。『知らない』と事實を云ふと、醫者は、その夜、浮氣女のフイリイネが、人の前を構はず、戀の樂しい話をしたので、あの少女は、それにそゝられて、平生戀慕ふ人の側にたゞ一夜でも寢たいと、勇氣を鼓して酒を飲みその足で、あなたの室へ近寄つたら、先へ女の人が入つたのを見て、失望して、琴彈の老人の所へ駈け込み一夜を苦悶に明したといふことを、ナタリイさんが、やつと女から聽き取つたさうですといふ。そんなら、面を見せてよいか惡いかといふと、それは判らないが、兎も角も逢つて見よと勸める。フエリックスとミニョンとじ睦く遊んで居る際に、今がよからうとナタリイが、彼を痩せた少女に會はせる。或日、ナタリイは、彼に、あなたは私の友人のテレエゼさんに結婚を申込んだのでせうと云ひ、托されたといつて彼宛の手紙を渡す。結婚のことを手紙でロタリオに告げようとする時、ヤルノが來て、『テレエゼさんは、女優の子で無いことが判然としたから、ロタリオさんとの結婚を急がねばならないから、

キルヘルム君は、少し待つて呉れ』と云つて歸る。テレエゼは、他人が邪魔をしさうだから早く結婚したいと云つて來る。ロタリオからは、直接テレエゼへ母が女優でなかつたことを知らせたから、彼女が、キルヘルムを選ぶか自分を選むか自由にさせたいと云つて來た。ナタリイの叔父の像が在る部屋でナタリイと彼と語つて居る時、ミニョンとフエリックスとが、テレエゼの來たことを早く告げることの競爭をして飛んで來た。ナタリイがミニョンを抱くと心臟が激しく鼓動してゐる。激しく運動してはよくないと云ふと、少女は『心臟を早く裂かせて下さい』と云ふ。テレエゼが突入して來て、キルヘルムに抱き付き『永久かはらない妾の良人です』と云ひ續けざまに接吻する。ミニョンが、その場に倒れる。そして蘇生しない。部屋を出て、テレエゼがキルヘルムに抱きついて、切ない情を訴へる。彼が再びミニョンの死體に近よらうとすると二人の醫者が、生ける面影を保存する方法を施したいから數日近付かないでくれといふ。若い醫者の器械の見覺えのある紐を貰ふ、そし

て、ミニヨンが峠で、髪を以つて、血を拭ひつゝ世話をして呉れた、往時を思ふ。この莊園へロタリオ、アッベ、ヤルノ等が來て、ヤルノは、往年、俳優に適しない君をその境地から救ひ出さうと、アッベと協力苦心して、あの亡靈を出したので、亡靈はアッベ自身か然らずんば雙子の兄弟だらうと云ふ。ナタリイの弟フリイドリヒが來てキルヘルムの部屋で、フリイドリヒから貰つた剃刀『お忘れなさるなよ』の銘を見て、貴公があの女に思はれてゐたのが妬けて耐らず、二人で逃げた、赤い服の士官は拙者でござる。貴公がマリアアネと思ひ込んで、跡を追はせたその使は、此方の味方にしたのだと云ふ。ヤルノは、別室でテレエゼの眞實の父母のことを明にした。ナタリエの好きなキルヘルムはテレエゼへの結婚申込は破棄して可なりといふ。ヤルノは、吾々の團體が世界の名所に散り、誰でも入團させて、世界的に事業の手を擴げるについては、アッベは露西亞に自分は亞米利加へ移住の計畫を立てゝゐる。そして、リイデイと結婚するのだと云ふ。ナタリイの伯父の友人である伊

太利の侯爵が來る。ミニヨンの葬儀の際、その侯爵が少女の遺骸の右腕の十字架像の刺青によつて、姪であることを知る。伯爵はキルヘルムに姪が多年養育せられたことを謝し、子供を伴れて、伊太利の彼女の故郷を訪ねてくれと云ふ。その夜、昔戀人であつた伯爵夫人が來た。

アッベは、侯爵の直話を書いて衆の前で讀んだ。それには、侯爵の弟アウグステシが、親身の妹と知らずに一美人と戀をして、結婚しようとしてそれが解つた。その時には既に妹スペラアタは孕んでゐた。その生れた子がミニヨンであつたが、人に攫はれた。その爲め母親は半狂亂となり、弟は精神に異狀を來し、竪琴を彈く時の外は始終落着かなかつたが妹の死後、獨逸へ出たらしいと書いてあつた。それからなほ侯爵が、キルヘルムに伊太利へ來てもらひたい。スペラアタに屬すべき財產があるのを禮として差上げたい希望を有つてゐられるといふことも告げた。

竪琴彈の老人もこの莊園に來た。髯も服も通常人のやうにしてゐて、病人らしく

なくなつて居る。それは牧師の家で、阿片丁幾の一壜を手に入れて、これさへ飲めば、忽ち永眠せられるといふので、氣が落着きはじめたといふのだ。一日、アウグスチンが蒼い顔をして、フエリックスを助けよ毒を飲んだといふ。醫者がアウグステンの在つた部屋に入つてみると、阿片丁幾の壜は空であり、扁桃液汁の壜は半分ほど空しくなつて居り、コップには阿片丁幾が入れられてあるので、壜から飲んだかとフエリックスに尋ねるとコップのを飲んだと答へたので、酢を飲ませたりして大騒ぎとなつた。子は、酢のあと故砂糖をナタリイにせがむ。危險な夜だと云ふのでナタリイとキルヘルムは徹夜をして子を看護したが、どうも異狀を認めない。子はコップから飲んだと云ひ張る。然し、密にナタリイに告白して壜から飲んだのだ、以前、壜から飲むと不行儀だつて、お母さん（アウレリイ）が叱つたから、此所でも嘘をいつたといふ。それで一同が安心したが、老人は自ら咽喉を切つて死んだ。老人は、不圖、醫者の部屋で、侯爵の話を書いたものを讀んで、死ならと用意をし

たが、今一度庭へ出て歸つてからにしようとした間に、子供が、壜に寄つてゐたので、驚いたのであつた。伯爵夫人は、莊園を出立する際、キルヘルムと、ナタリイの手とを結いでおいて馬車に乘つた。ロタリオと、テレエゼとは近日結婚することになつた。フリイドリヒは姉が、子供を介抱した夜、いよ〳〵キルヘルムの妻になりたい決心をしたとアッベに云つてゐたのを立ち聞きしたので、皆で、キルヘルムとナタリイとを結婚させる。以上が修養時代である。

『遊歴時代』では、マイステルが、フエリックスを伴れて旅に出て、アルペンの嶮岨な山道にさしかゝつた際、子が手に持つてゐる石の名を尋ねる、それは、雲母所謂 Cats gold だと教へると、今度は木の實を摘んで來て名を尋ねる。いろ〳〵尋ねられて見ると知らないことが多いのに氣づく、獵師に尋ねると直ぐ解るなぞ云つてゐる所へ二人の子供があらはれ、續いて丈夫さうな若い男が驢馬を曳きその上には、やさしい婦人が赤ン坊を抱いて乘つてゐた。この大工の家族と忽ち懇意になる。

旅先からナタリイへ發する手紙が所々に掲載してある。又こゝに『セント・ヨセフの話』を挿入して居る。フエリツクスと知合ひになつたフイツツと云ふ子と、その土地で噂に上つて居る坑夫モンタヌスの居る山へキルヘルムと及びフエリツクスと登る。フエリツクスは、洞穴で、Octavo 版の書物より大きくない燒付細工の施してある金製かと覺しい古箱を拾ふ。鐵槌で巖を撲つ音を聞きそれがモンタヌスの手から發するのだと云ふので、その方へ行くと、『ヤルノさんだよ』とフエリツクスが云ふ。邂逅を喜んで、キルヘルムとヤルノは抱き合つた。子は石を出して、ヤルノに敎を乞ふ。ヤルノは實地修業の功果を力說する。フエリツクスは又、小箱を拾ふ。山を下つて、フイツツの導くまゝに大きな園へ入らうとすると、發砲の響がして、キルヘルム父子は捕へられ、フイツツは、上衣を殘して逃げ去つた。この處へ樹を盜みに來るものが多いので、かやうな用意がしてあつたので、やがて父子の疑は解け、大に優待せられる。ユリエッテとヘルシリイといふ美しい姉妹に面會する。妹

が佛蘭西語から譯したといふ『悪なる巡禮女』を書いて讀む。それをこゝにグエテは挿入して居る。姉妹は、三年家に歸らない從兄弟のことや、その母が餘り遠くない城に住んでゐることなぞを話す。この姉妹の叔父から、近い獵小屋まで、來いと云つて來たので、キルヘルム父子は、美しい姉妹等と馬に騎つて出た。彼の目に姉妹の叔父は立派な人物と映じた。歸りに、花を取らうとしてフエリツクスが濠に落ちたが、花をば取つて來てヘルシリイに差出したので彼女は立派な頸巾を返禮に與へた。この叔父に宛てた、レナルドオの書を挿み彼が叔父の、嚴格過ぎる追放を敢てした小作人の娘ファレリナを思つてゐることを明にして置き、ユリエッテ姉妹が伯母に又伯母から姉妹にあてゝ手紙を載せ、又短篇『誰が裏切人だ』を掲せて居る。姉妹の伯母、マカリイの莊園へ來て見ると、高尚な靈的夫人で世間的にも活動して居る。アンゲラといふ忠實な女が附いて居る。天文臺なども設けてある。マカリイの依頼を受けてその甥レナルドオを探すことを約す。レナルドオは、ファレリナと

いふ娘が、叔父に收むべき税を滯らせてゐるにつき依頼を受けて盡力することにして居たに係らず、叔父がその娘父子を追出したので、それを探しに出て三年も歸らないのだと聽く。幸、レナルドオに遇つたので人の妻になつてゐるファレリナを二人で訪問すると、その女は叔父が愛した法律家の娘で、探すべき婦人は、ナホヂイネと云ふのだと知る。彼はレナルドオの依頼を受け、行々、ナホヂイネを探すことになる。レナルドオは、彼女が滿足な生活をしてゐればよしさうでないならば助けたいといふ。レナルドオは世界結社の一人となる。レナルドオの紹介した骨董屋を訪ね、フェリックスの拾つた小箱を預ける、この人に勸められ敎育縣へフェリックスを置くことに決心して伴れてゆく。こゝに『五十歳の男』といふ短篇を入れて居る。これは面白いものである。五十歳の男なる退役陸軍少佐が自分の息子の中尉の妻になるべき姪に惚れられて、又、息子の惚れてゐる未亡人に惚れられ紛糾する事件がかいてある。キルヘルムはナホヂイネを見出して彼女は滿足の地位に居る安心

せよとレナルドオに通知するが、彼女の平和を亂したくないと所在を通知しない。そしてその手紙の復製をヘルシリイに出しアッベにも發信する。ヘルシリイは手紙で、「五十歳の男」に在る未亡人と、その若いヒラリイといつて叔父に惚れた女とに旅でお遇ひなさいと云ふ。彼はミニョンの故郷へ行く途中、風景、小説、戯曲に多大の趣味をもつ畫家と知合ふ。此の畫家は、『修養時代』で、ミニョンの事を讀み、彼の姿を何度も繪にしたが、なほ彼の故郷を見にゆくのだと云ふ。いよ〳〵ミニョンの生地に入り、ギブリアニ侯爵家を訪ねると、まだ旅から歸らないといふので、淋しみを感じたが、既に多大な謝禮を貰つて心苦しいのに、此上恩報じといつて思ひ切つたことをせられないのを喜んだ。遇然、美しい未亡人と、ヒラリイに出遇ふ。畫家がヒラリイに懸想する。四人で、遊び廻る所が巧く描かれて居る。太陽、空、樹木、水の色、ゴンドラ、月光などの文字によつて、四人は肉情關係に陷ずに分れる。レナルドオや、アッベの手紙によつて、レナルドオが叔父から貰つた、亞米利

加の土地が、幸にアッベ管理の土地と接近してゐるので、協力して堀割を造り殖産に盡さうといふやうな計畫を立てゝ居る事を知らせて居る。

マイステルが教育州に來て見ると子は立派な若者になり厩長の職を得て居る。此の理想境を視察して廻る。山の祭でヤルノに遇ふ。ナタリイに手紙を書く。この州の職工の群で成立して居る平民主義的區域に入ると、レナルドオが居る。驚きの最中、抱きつくものがあるよくみればナタリイの弟フリイドリヒだ。これらの人々は此處で亞米利加移住の準備をしてゐるのであつた。ヘルミリイから、性質のよくないフリツツの會て殘した上着が調査せられた、そしてその衣嚢中に、あの小箱の鍵があつたと知らせて來る。レナルドオの日記によつて、彼が山地へ結社に關する、紡織事業の用向で大きな工場へゆくと女主人の未亡人がナホヂイネであり、支配人が懸想してゐたが、彼の方を餘計愛したことが知られる。理髮人の話として『新メルジイネ』の話がこゝに挿入してある。ヘルシリイが、フエリツクスの拾つた箱も

手に入つたと知らせて來る。こゝに、結社の仲間のセント●クリストフエルの話として『危險な賭』を挿入して居る。これも面白いものである。亞米利加移住は、殖民事業に熱心なオドアルドオの助けを得て、いよ〳〵出發することになる。獨逸へ殘る組もある。ロタリオ、レナルドオ、フリイドリヒ、ヤルノ、キルヘルムなど移住組で、これらの人達は、あちらへ渡つて、社會改良の方針で新民主的理想的新憲法に據る新生活をしようといふので、その方法の大要も書いてある。又、レナルドオの日記で、ナホヂイネと彼との關係を示し、キルヘルム宛の、ヘルシリイの手紙では、フエリツクスが、立派な青年になり良馬に乘つて彼女を訪ねた。彼女が例の小箱と鍵とを出すと、僕が開きたいのはそんなもので無くつてあなたの胸だといひ、亂暴に箱を開かうとして鍵を折つた。そして彼女を抱き、脣を脣の上に持つて來ました、彼女はいやではないけれど拒んだら、憤然としてそれぢや、死ぬるまで、これから、世界を乘り廻すと云ひ放つて出て行つた事を知らせて居る。

キルヘルムは、いよ〳〵船が出る前に戻ると約束し、一同から離れて教育縣へ行つた。そして馬に乘つた若者が河に落ちたのを救ふと、わが子であつた。早速腕の血管に刺絡針をして蘇生させる。父子が港へ急ぐと船は既に出た後であつた。こゝでゲエテはこの小説のペンを置いたのだ。

ゲエテの『ファウスト』

ゲエテが、ファウスト Faust を書きはじめたのは、彼の年齢、二十六歳、クリングル Klinger のシュツルム、ウント、ドラング Sturm und Drang といふ戯曲の名を以て流行した精神界の不自然に對した革進運動、其れは狂風の如くに、破壞し、突進すべしといふ主張であつたものが盛んであつた頃、即ち一千七百七十四年、『ェルテル』を書いた年である。書かうと思ふ心は、二十歳頃からあつたらしい。完成は、一千八百三十一年、死期に先つこと僅に八ヶ月、殆んど、六十年に亘つて、彼の腦裡を去らなかつたもので、彼は、或期間、これを中絶して續ける勇氣を缺いた。爾るに、友人シルレルは、此の大作を完成するやうにと、機會のある毎に、勵まし、奬めた。それ故、ゲエテ自らも、シルレルの力によつて、進捗したといつても可いと謝意を表した。併し、『君のファウストは如何なつた』と、云つては、促した友人

が、一千八百五年に死んでから、七十五歳の時には第二部はまだ、大筋や斷簡であつた。その完成を、熱心に勸めたのは、エッケルマンで、以來七年にして、やがて完成せむとする時分、『君が奬めて成就させるのだ』とエッケルマンに云つて居る。笑ふべきは、當時の自稱天才が幾人も彼に書を寄せて、貴殿にして繼續して書き得られないならば私が代りたいと申し込んだことである。グエテは微笑を漏したであらう。

グエテは、シエツルム、ウント、ドレングルとして弱くなかつたが、同時に彼は、この熱に狂氣する程でない、冷靜な或物を持つてゐた。それは、この劇詩の進展に從つて觀得することが出來る。此の劇詩も、傳說に材を取り、彼の經驗及び、人生觀、宇宙觀を結び付けたものである。第一部、ファウストがグレエトヘンに於ける戀愛の如き、彼が、愛したグレエトヘンに對する戀愛の經驗を、多大に織つたものである。そこには、エルテルの熱情が脈打つて居る。第二部、ヘレネが出る頃にな

ると、彼の古希臘崇拜の情が觀られる。ファウストとヘレネの配合は、クラシックとロマンチックとの調和を象徵的に表さうとしたもので、その間に生れた男子、オイフオリオンは、詩人バイロン Byron を寫したものである。彼は常套に對する反逆を此の戲曲で企て、自然と美と愛とへの飛躍を志し、そして常套の間に、自然と愛と美とを觀出す外はないと云ふことを示すに終つたと觀られる。

此の戲曲は世界傑作中の優位を占める哲學的深邃なものとして、これに就いて研究し論議した書物は甚だ多い。その材料たる傳說についての研究書も少くなく、グエテのファウストの中の、三行四行の言葉に就いて、その言葉と、グエテの經歷又は、思想などを聯結させて、云爲する時は、長くなる故、これを略し此の書では、簡單に、その梗概を語るに止めて置く。第一部第二部に分つてあるが、第一部の方が、普通興味が多いとせられる。

獨逸伝ヨハン●ファウスト Johann Faust といふ魔術を學び各地を巡つた人物があ

つた。察するに一千四百八十年頃に生れ、一千五百四十年頃死んだものだらうといふ。此のファウストに關する傳說も一致しない點が多い。これに關する書物も獨逸にあつたが、それが英國に渡つたものか、シエエクスピヤの先輩ともいふべきマルロオ Marlowe が劇に作つた。旅役者はこれを獨逸で興行した、宗敎に害ありとして禁止され人形芝居になつて行はれた。レッシングも多年ファウスト戲曲を作らうとしたが、どうしたものか、世に出なかつた。グリンゲルもファウストに關して劇詩を作らうとして企てたが、名を成さなかつた。他の文士も同樣の題目でペンを動かせたが、ゲエテの此作の前には、大陽に於ける螢光の如くに光を失つた。古本の惡魔はメフオストフイレス Mephostophilis であるが、ゲエテは、メフイストフエレス Mephistopheles としてゐる。この惡魔に、彼は友人ヨハン・ハインリッヒ・メルクを多少描いて居る。

ファウスト第一部は一千七百八十七年頃には一先づ成立つた。これを世間一般に

ファウスト原本と呼び、それに手を入れて、――九十年ファウスト斷簡として公にし、更に手を入れ書加へて、一千八百八年にファウスト第一部として出し、第二部は死後、出版せられた。第一部のはじめにある、薦むる詞、前戲、序言は一千七百九十七年の作である。此の年齒五十歲に垂んとしてゐる際で、過去を回顧すると、グレエトヘンの事、友人のこと、はじめこの劇詩が出來た時分、これを聽き又は讀み賞讃してへれた人も旣に此の世の人でなくなつてゐる。然しシユツルム、ウント、ドランング時代のこと、則ち「よろめける姿が」再び靑年氣分を呼んだゲエテに近づき來る。こゝに於て、「薦むる詞」は成つた。次の、「前戲」には、マイステル中にあるセルロやメリナのやうに、當時の興行主が、金錢を得んことを欲して藝術の墮落を來したことを嘆いて居る。序言で、三天使が歌ふその歌にゲエテの世界觀が觀られる。惡魔メフイスフエレスが主に近づき不平をいふ。主は、己の子分である、ドクトル、ファウストを、いつかは安心出來る境へ導いてやると云ふと、主が許すな

ら、主に裏切させて、ファウストを惡魔道へ引込んで見せると惡魔がいふ。主が、それでは其方思ふまゝに扱つてみよ、善い人間は、正しい道を根底から全く忘れはしないと、汝が弱音を吐く時が來よう、と云ひ、更に、己は根底から、お前達を憎んだことはないなどといふ。この主の言葉も、ゲエテがカントの根本惡などに反對した意見を窺ふことが出來る。

（第一部）夜、ファウストが書齋に在つて、顧ると多年哲學法學醫學あらずもがなの神學まで研究したが、昔より優れたとも思はれない。世間から賞讃も受けるそこらの誰彼に比したら氣が利いても居らう、疑惑に惱まされもしなければ惡魔地獄も恐ろしく無いが、歡喜といふものも失せた。一體こんな所にかうして居て何となる。自然の中へ神が造つて置いた人間が、この室を世界と籠つてゐて廣い世界へ出られなくつて如何すると嘆き、佛蘭西陰陽師ノストラダムスの大世界の符を觀、世界の調和を喜ぶが、なほ地の精を呼び、自然の根源に觸れようとする。地の精が現

はれる。物凄さにファウストも仰ぎ見得ない。すると、超人であり、地の精を見たがつてゐてその有樣は何だと嘲られる。乃で勇氣を出して、汝の同類たる俺だ、恐れはしないと云ひ又、貴公に近親な物だぞといふと、地の精は、其方の見る靈に其方は似てゐても我にお前は似て居ないと云ふ。ファウストは、神に肖る像の俺が貴公にさへ似ないと云ふのかとそこに倒れる。その時學僕ワグネルが入らうとして戸を敲く、あゝ死だと、失望したファウストの所へ、ファウストの最早、重きを置かないファウストの學問に無上の崇拜を拂つてゐるワグネルが入つて來る。これに對し、古文書を一口飲んで永い間渇きを止め得られるもので無い、自己の靈から泉を湧き出させなければ何にもならない淺薄なものだと敎へる。學僕の去つた後、絶望した彼は、物質の制限から離れ、死を超越した天地に突入しようと毒を盛つた杯に口を寄せた時、復活祭の鐘が聞え、『基督はよみがへりたまへり』の歌を聞く。幼時から聞きなれたその人間の福音として傳へられる歌によつて、死を急がないことに

なる。

ワグネルとファウストとは、復活祭に都門の外に出てゐる。この日曜の祭日を愉快に過さうと、色々の人が閭門の外に出る。職工の徒弟、下女、書生、令嬢、乞食、老人、兵卒、農夫等が、それ〳〵の境遇に從ふ、ふさはしい意欲を有つて居ることを詩人は巧に描寫して居る。百姓爺がファウストを見つけ、病氣の時に、ファウストの父の醫藥で、助かつたといひ長命して多くを救つてくれと云ふ。ファウストは恐ろしい練藥を當てかつて流行病よりも多くの人を父親が殺したと世間の賞讃を輕視して居る。若いワグネルは輕視する書物を重視して話しかけるので、俺の胸には二つの靈があつて、一つは下界に執着せんとし一つは高い靈界に入らうとしてゐる。この大氣の中に、天と地との間にそこを支配しながら漂ふ靈があるなら新生活へ伴れて行つてくれといふ。ファウストは一頭の怪しい尨犬を見つけ、それを伴れて歸る。

犬を書齋に伴れ込んで、『あゝ生命の流、その源泉へと心があこがれる』『啓示が欲しい』と云ひ、新譯全書を獨逸語に譯しようとして、ヨハネ傳第一の句『初に道(ここは)あり』をそのまゝ譯したくない言葉の前に概念がある、概念は力に因由す、否それよりも『初に活動あり』とすべしと思ふ。こゝにも、ゲエテが、世間普通人の善惡の差別に違つて、不活動を以て罪惡とする見地が窺はれる。彼が、『墓場のやうな靜寂を平和と云つて喜ぶものに與しない、よし、何事にても起り來れ、予は影を追うて痴言を發する衆民に媚ぶる能はず』といふ意見を抱いて、僞善に抗して戰つた所のバイロンの活動を喜んだ彼の意氣が觀られる。その活動慾の起るのを利用しようと犬に化けてゐた惡魔、メフイストフエレスが、本性をあらはし初めるファウストが化物に對する呪を試る。犬になつてゐた惡魔は、旅書生の姿になつて現れる。『何者だ』と云はれて、『彼の常に惡を欲し乍ら常に善を作る力の一部分だ』と云ふ。それから『常に物を否定する靈だ』とも云ひ、又『無に對して立つてる世界をどうとも

なし得ない。人間にも、どうも自分の影響は少い』と慨く。ファウストはその不徹底な言葉を聽いて、冷笑する。惡魔は、出るのに、敷居の上にある、三角星形(ペンタグラマ)が邪魔になると云ふ。それなら窓からでも煙突からでも出ろといへば、惡魔にも法律があつて入つた口から出なきやならないのだと云ふ。汝等に法律を守る心があるなら契約を結ばうとファウストが云ふ。惡魔は契約は出直して來てからにする。一つ術を見せて上げよう。あなたの官能が滿足するやうな術をと、最前から窓邊に在つた靈に命令すると靈等が歌ひはじめる。ファウスト好い心地に歌聲を聞きつゝ眠る。此奴に艶な姿を見せてやれと靈に命じ、又鼠に命じて邪魔になる六角星形の在る所を噛ませて、惡魔が去つて了ふ。ファウストが醒めて騙されたことを知る。

メフイストフエレスが金絲の刺繍をした赤色上衣に、地の強い絹外套、鷄の羽をつけた帽子を被、劍を吊つて、ファウストの前に來る。そして、同樣の服裝をしたまへ自由に人生の味を見せて上げるといふ。ファウストが死を願つて死に得なかつた

といふと、惡魔は、あの晩、毒を飲み得なかつたぢやないかと冷笑する。そして歡樂世界へ誘ひ出さうと努める。現世未來を重視しなくなつてゐるファウストと惡魔とは、此世では惡魔が奴隷になり、あの世では、ファウストが惡魔の奴隷にならうと約束する。ファウストは惡魔などの力で、この活動慾が痲痺するものか、快樂で誘惑し切ることが出來るものか賭をしようと蔑む。賭をすることになり惡魔は紙片に契約の署名を要求する。その契約は『まあ待つて呉れ、お前はいかにも美しいから』と口に漏らすことがあつたら生命をその場で失つてもよろしいといふのである。出立の前、ファウストは時の早瀬に身を投げよう。活動して休まないのが男子だと云ふ。ゲエテの活動主義が、ファウストの言葉となつて迸つて居る。惡魔も隨分、警句を吐く。『貴公の解し得る學問中、一番大切な事は學生どもに云ひ得ないことだらう』などは、穿ち得て得る。ファウストの高名は多くの學徒をして彼を訪はしめる。ファウストが旅立の用意をする間に、惡魔が、上衣と帽子を借用して、ファウ

ストになり代つて、學生を入れる。此の地へ來たばかりの學生であるのだ。時間を善用せよとか最初に論理學を修めたがよからうとか、形而上學に志せとか云ふ。その學生が醫學を志したいが先生の思召は如何かと尋ねる頃は、惡魔は、學者の態度で物を云ふのも飽いたので惡魔的の本音を少し露はさうと、君が努力しても學ばれることとしか學ばれない、それより度胸が据れば世間も信じる。女を巧に扱はなくちやならない、女の病氣は一箇所から治せるものだ、人の容易に障らぬ所々に障つて遣り、細い腰を引抱えて下紐の括りがしつかりしてゐるかを見て遣れなど云ふ。學生が記念帳を展げて何か書いて呉れといふ、學生が出て行くと、ファウストが旅裝束で出る。まづ小天地へ案内してそれから大天地へと行きませう、此の外套を擴げれば二人乘つて行けますと早速外套を擴げる。

ライプチヒに、アウエルバッハの酒場といふのがありゲエテは、そこによく行つたものである。その酒場へ、ファウストが、惡魔と飛んで來ることにしたのだ。先

づ、彼等の來ない前に、學生等數人が歌ひ乍ら酒を飲んでゐる。二人が入つて來る。田舍者だらうと學生が輕蔑する。惡魔が學生共を馬鹿にして、こんな酒より上等なのを献じようと、彼等の座してゐる卓に錐で一つ穴を穿つて廻る。そして、彼等が各々望む酒をその卓の穴から噴出させる、それから、魔法で、學生等を迷はせる。

次に、魔女の所で、ファウストが若返りの藥を飲むのだ（ゲエテは、一生に何度も若返つたといへる）魔女不在の厨に鍋が掛つて居り、牝の尾長猿が、その鍋のものが煮えこぼれないやうに掻きまぜて居り、牡の尾長猿と小猿等が側で火に當つて居る。そこへ、ファウストと惡魔とが入つて來る。惡魔が猿と言葉を交して居る間に、ファウストは、大鏡の中に、一美人の姿を見て、過去に於て、かやうな美女を見たことは絶無だ、これは地上のものでないと恍惚となる。惡魔はよくみて樂みなさい今にあんなのに接近させて上げるといふ。鍋の中の掻きまぜを怠つたので、煮えこぼれる、火焔が煙突の方へサッと向つた時魔女が、煙突から下つて來て、猿を

叱り、二人を見て、不在中に忍び込んだ奴に熱い痛みを與へて遣らうと焔を彈き掛ける、惡魔が、帽子に挿した雞の羽が見えないかい、俺を見忘れたかと威嚇する。魔女は、本性を知つて、サタンの旦那でしたかといふ。用事はと魔女が尋ねると、例の藥が入用だといふ。魔女が妙な動作をして、呪文を讀み後、藥をファウストに飲ませる。そこを去らうと惡魔に促されて今一度鏡の中の美人が見たいとファウストが云ふと、惡魔は今に實物の絶好の美人を御覽に入れますよと云ひ小聲で更に、あの藥が利くからには、今に、どの女でもヘレネに見えると云ふ。

街を少女マルガレエテ（グレエトヘン）が通つて居るのを見たファウストが、『美しいお令嬢、此の肘をお貸致してお送りしませう』と接近すると、美しくもなく令嬢と云はれる身分でもありませんと、グレエトヘンが振り切つて歸つてゆく。ファウストは、あんな美人で、しつけがよく、おまけに少しはツンとした所があつてよい、紅い脣、輝く頰、伏目に見て居て、それで拒んだ所が氣に入つたと口に出し、

惡魔に是非彼女を、とりもつて呉れといふ。惡魔は、あまり高潔な女を、ファウストが選んだので、少し面喰つて、あの少女には手が屆かないと逃げようとすると、ファウストはあの娘は滿十四歳にはなつて居ようと急き込む。惡魔が、十四日も掛らねば機會が得難いと云へば、ファウストは惡魔の手をかりなくとも、七時間に手に入れて見せるといふ、惡魔漸くなだめて、今日、彼女の部屋に案内するといふ、土産を用意せよといはれて惡魔が昔、方々に埋めて置いた寶を取り出さうと約束する。

グレエトヘンは、自分の部屋で、道で遇つたファウストのことを思ひ出して出てゆく、あとに、ファウストが部屋に忍び込む、惡魔が持つて來た小箱を箪笥の中に入れて逃げる。少女歸つて來て、着物を脱ぎ乍ら、『昔ッウレに王ましき、情深かる夫にとて、王妃は臨終に殘しけり、手づから黄金の杯を』といふ物語詩を唱ふ。着物を箪笥に入れようとして、綺麗な箱を見、怪んで開けてみて、立派な裝飾品の入